

## 巻頭言

—「加々美光行教授追悼特集」発行に寄せて—

高明潔

(ICCS 現代中国学ジャーナル編集委員長)

加々美光行教授は愛知大学現代中国学部（1997年設置）の開設に尽力され、初代学部長となり、現代中国学部の現地主義と今日言われるものを築き上げました。その後、COEプログラムの採択を受け、愛知大学国際中国学研究センター（ICCS）（2002年設置）を設立され、初代センター長となり、「現代中国学」の構築、世界の現代中国学研究教育推進のための国際的ネットワークの構築に尽力されました。研究面においてはシンポジウム、研究フォーラムなどの学際的対話を継続して行い、数多くの実績を残されてきました。教育面においてもCOEプログラム採択により、愛知大学大学院中国研究科と連携して中国人民大学、南開大学との間でデュアルディグリープログラム（二重学位制）を構築し、ICCS事務室にて受入対応をスタートさせました（現在は大学院事務課にて事務対応を行っています）。愛知大学国際中国学研究センター（ICCS）は国際的アカデミー・コミュニティであり、加々美光行教授が残した「学」的遺産であると思います。

今回、加々美光行教授の逝去をうけ、ICCS 現代中国学ジャーナルの別冊として「加々美光行教授追悼特集」を発行することといたしました。愛知大学関係、研究関係、新聞社関係のほか愛知大学大学院中国研究科デュアルディグリープログラムの卒業生達など多くの方から追悼文の投稿をいただきました。投稿いただいた学生達には加々美光行教授の教えを引き継いでいってもらえるものと思います。

本別冊に投稿いただいた方々に感謝の意を申し上げます。

## 加々美光行教授 業績一覧



加々美 光行 愛知大学名誉教授  
(かがみ みつゆき、1944年3月19日～2022年4月22日)

### 著書

1. 『文化と革命 | 毛沢東時代の中国』 共著 1977年6月 三一書房
2. 『現代中国の挫折 | 文化大革命の省察』 単著 1985年3月 アジア経済出版会
3. 『現代中国のゆくえ | 文化大革命の省察Ⅱ』 共著 1986年3月 アジア経済出版会
4. 『逆説としての中国革命 | 〈反近代〉精神の敗北』 単著 1986年6月 田畑書店
5. 『漂泊中国 | 転換期アジア社会主義論』 単著 1988年3月 田畑書店
6. 『現代中国の黎明 | 天安門事件と新しい知性の台頭』 単著 1990年3月 学陽書房
7. 『天安門の渦潮 | 資料と解説 / 中国民主化運動』 共著 1990年5月 岩波書店
8. 『はるかより闊来つつあり | 現代中国と阿Q階級 / 長時間討論の記録』 共著 1990年7月 田畑書店
9. 『知られざる祈り | 中国の民族問題』 単著 1992年3月 新評論
10. 『市場経済化する中国』 単著 1993年4月 NHK出版協会
11. 『中国 | 政治・社会』 共著 1995年2月 アジア経済出版会
12. 『アジアと出会うこと』 単著 1997年7月 河合出版
13. 『21世紀の世界政治3 | 中国世界』 単著 1999年11月 筑摩書房
14. 『歴史のなかの中国文化大革命』 単著 2001年2月 岩波書店
15. 『無根のナショナリズムを超えて | 竹内好を再考する』 共著 2007年7月 日本

評論社

16. 『鏡のなかの日本と中国 | 中国学とコ・ビヘイビオリズムの視座』 単著 2007年8月 日本評論社
17. 『中国の新たな発見』 共著 2008年4月 日本評論社
18. 『中国内外政治と相互依存』 共著 2008年6月 日本評論社
19. 『中国の民族問題 | 危機の本質』 単著 2008年8月 岩波現代文庫
20. 『裸の共和国 | 現代中国の民主化と民族問題』 単著 2010年7月 世界書院
21. 『未完の中国 : 課題としての民主化』 単著 2016年3月 岩波書店

学術論文

1. 「革命前夜の中国共同体 | その「封建」的要素に対する試論的考察」 単著 1968年12月 『アジア経済』第9巻第12号
2. 「中国郷村建設運動の本質 | 30年代国民党官僚資本下における」 単著 1970年1月 『アジア経済』第11巻第1号
3. 「毛沢東思想考 | 文化大革命と「人間的自由」の問題」 単著 1972年12月 『アジア経済』第13巻第12号
4. 「文化大革命の栄光と暗影 | 陳伯達・林彪失脚をめぐって」 単著 1976年10月 『情況』1976年10月号 情況出版
5. 「文化革命の理念と現実 | 代行主義批判と理性の革命」 単著 1978年5月 『アジア経済』第19巻第5号
6. 「民族・国家・階級・文化大革命 | 現代中国の逆説」 単著 1983年2月 『中国研究』1983年2・3月合併号
7. 「魯迅再考をめぐる新島淳良氏の見方について伊藤虎丸著『魯迅と日本人』に対する新島氏の書評を読んで」 単著 1984年1月 『中国研究月報』第38巻第1号
8. 「中国革命と周辺・民族問題 (I) | 初期共産党とコミンテルンの民族政策をめぐって」 単著 平成元年4月 『アジア経済』第30巻第4号
9. 「中国革命と周辺・民族問題 (II) | 初期共産党とコミンテルンの民族政策をめぐって」 単著 1989年5月 『アジア経済』第30巻第5号
10. 「中国の周辺民族問題と国際政治の変遷 | 内蒙古地域と新疆地域を中心として」 単著 1989年12月 『歴史と近代化』岩波中国講座第4巻 岩波書店
11. 「戦後国際政治と中国政治の変遷 | 冷戦体制と対米対決の3道」 単著 1991年5月 『アジア経済』第32巻第5号
12. 「自己回復の道を求めて」 単著 1991年7月 『世界』1991年7月号
13. 「日中国交正常化20周年と戦争責任」 単著 1991年12月 季刊『中国研究』26号
14. 「精神の闇をいかに克服するか | 理想主義としての社会主義」 単著 1992年12月 季刊『窓』第14号
15. 「国際政治の変動と中国・アジア | 非同盟の視点から」 単著 1993年10月 鴨武彦編『講座・世紀間の世界政治』第3巻 日本評論社
16. 「中国の国家原理と民族」 単著 1993年11月 近藤邦康・和田春樹編『ペレストロイカと改革開放 | 中ソ比較分析』 東京大学出版会
17. 「鄧小平の最後の挑戦 | 脱イデオロギー的国民国家への道」 単著 1993年12月 季刊『窓』第18号
18. 「飽食と飢餓の会える場所 | 20世紀アジア革命の提起したもの」 単著 1994年1月 『思想の科学』1994年1月号

19. 「中華世界の内外 | ポスト鄧小平の中国の国家と民族」 単著 1995年7月 『現代中国』第69号
20. 「戦後補償とアジアの「人権」」 単著 1995年7月 『中国年鑑』1995年版 新評論社
21. 「明治人、石橋湛山の国家観から戦後50年を照射する」 単著 1995年8月 『思想の科学』1995年8月号
22. 「アジア・太平洋地域の安全保障」 単著 1999年10月 『軍縮』No.228 宇都宮軍縮研究所
23. 「反テロリズムと東アジア世界」 単著 2002年3月 『情況』2002年3月号 情況出版
24. 「激動する世界と中国 | 新しい中国学の構築に向けて」 単著 2003年3月 愛知大学 21世紀 COE プログラム国際中国学研究センター2003年度国際シンポジウム 『激動する世界と中国 | 現代中国学の構築に向けて』
25. 「ポスト冷戦と日中ナショナリズムのゆくえ」 単著 2004年3月 愛知大学 21世紀 COE プログラム国際中国学研究センター2004年度国際シンポジウム 『激動する世界と中国 | 現代中国学の構築に向けて』 2004年版
26. 「中国の民族政策をめぐる新思考:「族群」「自治と共治」 | 内蒙古自治区を中心に」 単著 2004年5月 『中国21』Vol・19 愛知大学現代中国学会
27. 「ポスト冷戦と日中ナショナリズム | いかに連帯を再生させるか」 単著 2004年11月 『論座』2004年11月号 朝日新聞社
28. 「新文化の共同構築は可能だ 時殷弘×加々美光行」 単著 2005年3月 『論座』2005年3月号 朝日新聞社
29. 「戦後日中関係の屈折した道のり | より広い歴史的視点から」 単著 2006年3月 『中国21』臨時特集号 愛知大学現代中国学会
30. 「中国外交の展開 | 「平和的大国台頭」論をめぐる」 単著 2006年6月 『東アジア共同体を設計する』 日本経済評論社
31. 「中国の内政外交の動力学をめぐる | 有根のナショナリズムと政治体制改革の出路」 単著 2007年10月 『現代中国研究』第21号
32. 「過渡期中国はどこへ向かうか | 中国の大国化と東アジア国際政治」 単著 2012年11月 『ICCS 現代中国学ジャーナル』第5巻第1号
33. 「内蒙古モンゴル人の咆哮 | 文化人類学者ナリビリカが提起する「記憶の共同体」」 単著 2013年1月 『思想』2013年第1号 岩波書店
34. 「「愛国」のタブーを超えて日中は関係の正常化を | 葛藤を抱えつつ接近する米中のはざままで 時殷弘×加々美光行」 単著 2013年11月 『世界』2013年11月号 岩波書店

## 追悼 故夫加々美光行に寄せて

夫の急逝から時間が止まったような日々でもあり、あまりにも目まぐるしく過ぎ去って行く時間でもあります。四十九日も過ぎ初盆ともなり、もはや仏となってしまった夫に対して話しかけお祈りしている毎日であります。

彼は大家族 12 人兄弟の末っ子として生まれ、戦後の日本全体皆が貧しい時代に生まれました。幼少時より病気がちだったり、3 歳の頃、口べらしのため里子に出されたり、と波乱万丈の子供時代でした。

それでも自然豊かな昔の東京で好奇心豊かな自然児として育ち、兄姉達の中で揉まれながら切磋琢磨して勉強やスポーツに励んでいました。

彼の勉強机は茶の間のチャブ台であり"ながら族"としていつも遊びや生活の中で勉強していたのですが、大学受験になった時、家族も期待してなかったはずの東大に合格してしまい、両親を喜ばした、というエピソードもあります。

若い頃は職場でイジメにあって困っている友人がいれば放っとけなくてその人と悩みをとことん付き合って助けようとする思いやりに溢れたエネルギーを持った人でした。

彼自身病気との戦いの一生だったせいかいつも根底に弱いものに対する他人に対する暖かい目がありました。人が好き、人間が好きな人でした、学者としては学者らしい人ではなくどんな分野の人ともつきあう破れかぶれの人でした。

まだまだやりたいことが沢山あったと思います。さぞ残念と思っていると思います。(愛大の皆様後はよろしくお願い致します。)

今頃は既にあの世に逝ってしまった懐かしい人達に会って楽しくおしゃべりに花を咲かせているのでしょうか。

新盆にて  
加々美邦子

## 加々美光行先生が着任された頃

—追悼のことばにかえて—

伊藤 孝司

愛知大学大学院事務課 事務職員（加々美ゼミ卒業生）

私が愛知大学法学部中国法政コースに入学した1989年。入学後、約2か月であの天安門事件が起きた。これから4年間、自分が向き合っていこうと思った国が未曾有の大混乱に陥り、西側諸国から厳しい制裁措置を受けることになった。中国に何が起きていて、将来はどうなってしまうのか。クラスの仲間は皆、漠然とした不安を抱いていた。

2年生になると、図書館や国際問題研究所で文献を探しながら、天安門事件やその後の政治状況について、クラスメートたちとの議論に明け暮れた。

1990年の秋学期が始まった。私たち学生の関心はもっぱらゼミ選択に向いていた。3年生から始まるゼミで中国政治の「いま」に向き合おうとしても、現代中国政治を主な専門とされている先生は本学に在籍していなかった。

ゼミ選択をどうしようかと悩んでいる時、本学法学部で中国政治思想史を担当されていた緒形康先生（現在は神戸大学）が私におっしゃった。

「伊藤君。実は今度、うちにとんでもない大物が来ることになった」

詳しいお話を伺うと、アジア経済研究所（現ジェトロ・アジア経済研究所）から加々美光行先生が本学へ移籍されるとのことだった。あまりの「大物」の名前に私も驚いた。

天安門事件関係の文献を読み漁っていた私たちは、加々美先生のお名前も当然知っていた。その先生が本学へ移籍されるという噂は、たちまちクラスメートに広がった。最終的に、中国法政コース生の15名近くが新設される加々美ゼミを選ぶことになった。

1991年が明けた。緒形先生は学生と加々美先生との「顔合わせ」をセッティングしてくださいました。私たちゼミ生予定者は、著名な先生をお迎えするのだからと、加々美先生と東京外国語大・中嶋嶺雄先生との対談記録「中国は変わりうるか——天安門事件1周年に」という雑誌「世界」の記事を読了しておくことを皆で申し合わせた。

さまざまな準備をした上で加々美先生をお迎えした。「世界」の記事を基に、私たち学生は何か自主的に発表や討論をしたのだと思う。加々美先生は、「これほどまでに熱心な学生たちが愛知大学で待っているとは思わなかった」と、終始上機嫌でいらしかった。

4月のご着任後、私はさっそく加々美先生に名前を覚えていただいた。ゼミには3人の「伊藤」がいたので、私は「孝司君」と下の名前と呼ばれていた。

今はない三好キャンパスのピロティで、加々美先生が私に声をかけられ、話された第一声が今でも忘れられない。

「孝司君。愛知大学は給料がいいねえ」だった。

前職のアジア経済研究所と本学の待遇を比較され、大学教員として着任されたことを先生は心から喜んでいらっしやった。毎週、新幹線で東京と名古屋の間を通われる二重生活が始まったばかり。すでに四十路も後半に入られた先生にとって、本学での勤務は肉体的に負担が大きかったと思われるが、それ以上に本学の待遇は魅力的だったようだ。私はこの一言で、先生の間人臭さを感じた。同時に、著名な先生に本学へ来ていただくためには、やはり待遇が重要なカギであることを知った。

「中国に関係していれば何を取り上げてても良い」と、ゼミの発表は加々美先生の専門である中国政治に限定されることはなかった。実際、中国経済や朝鮮半島の核問題といった、先生の専門とは違うテーマを選び発表する学生も多かった。専門外の問題についても、先生は常に的確なコメントをされ、ゼミ生の卒業論文（当時は必修科目）を指導された。

授業で扱う内容はハイレベルだった。学部の中国政治論の授業では「中華」の意味と中華世界のしくみについて、学部生のレベルに合わせて懇切丁寧に説明された。

学部の授業でも遠慮することなく、中国の社会学者である費孝通が提起した「多元一体化モデル」といった専門的な内容まで扱われた。私の就職後、中国少数民族論が専門の職場の先輩に向かって、私がすらすらと「多元一体化モデル」の説明をして驚かせることができたのは、ほぼ100%加々美先生の受け売りだったからだ。

毎回、高度な内容を扱う講義だったので、「授業準備にどれだけ時間をかけていらっしやるのですか？」と尋ねたことがあった。先生は、「いつも、ぶっつけ本番だよ」と笑って話された。一切の準備なく、日々の授業に臨まれていたことに私は驚いた。

加々美先生を指導教授に選んだ私の大学院生時代は、先生のお手伝いをしながら多くの方と出会うことができ、幅広く学ばせていただいた。

岩波新書の『紅衛兵の時代』を書かれた作家・張承志先生は加々美先生の古い友人で、1993年度の1年間、本学法学部で主として中国語を教えられた。先生の指示で、空港での出迎えから宿舎である赤池周辺での買い物のお手伝い、当時はまだ珍しかった中国語ワープロの使用法説明まで、私は張先生の身の回りであらゆるお世話をさせていただいた。

加々美先生と張承志先生が口をそろえておっしゃった一言が「中国に向かう態度（面対中国的態度）」だった。友人として中国を真正面から理解し、中国を何かの手段として利用せず、意見をすることは敬意をもって発言する。そのことを繰り返し私に説かれた。

中国語についても、庶民が話すことばをそのまま真似るのではなく、ラジオ・テレビのアナウンサーが話すような標準的で美しい言葉を話すように指導された。そうすることが中国の人々に対し敬意を示すことになるのだと。中国語や韓国語といった外国語を話すことが仕事になった今、先生の教えはずっと、私の胸に刻んでいる。

今から考えてみれば、ICCSで行われている中国研究は、加々美先生が着任間もない頃に私におっしゃった「中国に向かう態度」を研究の分野で具体化されたものだと思う。

私は就職後、いろいろな事情があり、主として朝鮮半島の問題に取り組むことになった。

言葉も、文化も、思想についても、朝鮮半島については無知な私があらゆる本を読み漁った。朝鮮半島も中華世界にあって、中華文明の影響は今も色濃く残っている。留学さえしていない私が朝鮮半島の政治思想に関する本を読んである程度理解することができたのは、学部と大学院で加々美先生から中華世界についての基礎を学んでいたからだと思う。

先生が私に繰り返し説かれた「中国に向かう態度」の一言は今でも忘れられない。私は「中国」を「朝鮮半島」に置き換えて、正しい態度で朝鮮半島の問題に取り組もうと思っている。それが先生へのご恩返しであると確信している。



## 香港、そして台湾

### —現実へ向かう光—

大澤正治

(愛知大学中部地方産業研究所客員所員、ICCS 元所員・運営委員)

加々美光行先生の天寿に合掌いたします。

加々美光行先生の功績は、先々に光を向けることにお力を注がれ、そして、そのお名前の通り、自ら、その光にむかって進み、積み重ねられたことだろうと思います。

とくに、その功績は中国へ光を向けたご研究に象徴されていると思います。

一般的に、先々に光を向けると、大切なことも見えてくるのですが、それまでに見なくともよかったところまでも見えてきます。加々美先生はその見える現実のすべてに優しさをもって光を向けられました。光が優しさをすみずみまでに浸透させるということだと思います。

そのフラットに行きわたる優しさに敬服いたします。優しさの感覚が十分でなければ感動を伝えることはできません。また、優しさの感覚が十分でなければ批判を受け入れていただくための信頼をえることはできないと思います。とくに、多様な姿の中国を見る時に、その優しさが大事になると思います。いつの時であったか忘れてしまいましたが、確か、北京へご一緒させていただきました機会に、加々美先生から、直接、「ぶれない優しさ」をいつも心がけていらっしゃる伺いました。

加々美光行先生に最後にお目にかかりましたのは、山田正平氏最後の主宰となりました東京での香港についての緊急講演会（2019年9月13日）でした。

2019年は習近平国家主席による「一国二制度」と「中国の夢」で求める理念の浸透が香港に及び、空前のデモのうねりが起きた年でした。



香港に関する緊急講演会での加々美光行先生（2019.9.13、東京・貸会議室プラザ）（撮影・山田ゆかりさん）

加々美先生は何より先に説明されたことは、「レッセフェール（自由）」の重い大切さについてでした。1960年代、香港人こそ世界で唯一の「自由市民」であったことを自らの香港での体験を経験に昇華させて強調されました。

そして、2019年の香港デモのうねりが水平展開していることから判断して、一つの方向を目指している理念と分散化が進む現実の隔たりが大変に大きいことを加々美先生は指摘されました。

講演の結論は、根絶しない中途半端な解決では終わりをはるかに遠いということであり、天安門事件の再来も十分ありえるとの観測も披露されました。

この講演会は、私が加々美先生から学ぶことのできた最後の機会でした。このとき、改めて確かめることのできたことは、現場の現実に対する優しさの穏やかな効果と、先見のために必要となる優しさゆえの分析力でした。そして、輝く光には持続的な優しさの絶えることのない供給が必要であるということでした。

ところで、この講演会では、中国の「一国二制度」の理念とその対応の多様性が基本のテーマとなっていました。当然、世界の視線はもっぱら香港に向けられていた時勢でしたが、加々美先生は、この香港に関する講演会の副題を「中国統一と台湾」とされました。

加々美先生は常に、香港問題と台湾問題のつながりに焦点を定め、光を向けていらっしゃいました。

加々美先生が先々に向けるこのような光の優しさは「ぶれない優しさ」であったことを改めて思い起こし、お元気な加々美先生のお姿を思い出すことができましたのは、本年 8 月の米国ペロシ下院議長の訪台のニュースを知ったときでした。このことが中国の将来にどのように作用するのか、あるいはしないのか、いろいろ考えてみなければならない時、「ぶれない優しさ」にあふれた光をもう授けられない現実を悟り、加々美先生への追悼の念が今一度、込み上げてきました。

加々美先生の偉大さとその業績が偲ばれます。改めて御礼を申し述べる次第です。

## 赤池での中国論

加治宏基

(愛知大学現代中国学部教授)

この追悼文を書くにあたり、かつて加々美先生からいただいた一篇の草稿を思い出した。ご自宅のあった名古屋市郊外・赤池の「青春は最後のおとぎ話」という喫茶店で、「最近、こんなのを書いてるんだよね」と差し出されたものだった。ちなみに、訃報を受けて連絡しあった学友らは、赤池駅周辺の店でご指導を受けたり推薦状を書いていたいたりした当時のことを、異口同音に語ってくれた。また加々美節が弾んでは、その場がさながら「赤池コンベンションホール」と化すこともしばしばであった。あの笑顔にこちらもノッてしまい、時に自分の研究内容について議論しそびれたことが、懐かしく思い出される。

閑話休題。現代中国研究の方法論をまとめたその草稿には、日本における中国研究に対する強烈な批判的問題意識がしたためられていた。曰く、「戦後日本の現代中国研究は、(略)中国認識に多くのゆがみを伴ってきた。その最たるものが文化大革命(以下、文革と略す)時期の全面中国肯定あるいは全面礼賛の研究だった」。その反省から、文革後の日本の中国研究では「中国の現実や将来を正しく認識しうるか否か、さらに中国政府幹部の有力なコネクションを通じて『内部』情報の取得が可能か否かのみが、研究方法論の出発点となって」きた。学術研究である以上、インテリジェンスとは一線を画すべきとの省察が行間に滲む。

他方で、丸山真男やJ.M.ケインズを引きながら「いかなる目的で特定の社会や人間を研究対象とするか」という社会科学の目的論とは、「社会のシステムや構造に対する一定の価値判断やイデオロギーを自明の理として含むものだ」と、主観性の自覚を喚起された。「科学研究に目的論的価値判断が不可避に介在する現実が見過ごされたうえ、目的論的価値判断やイデオロギーがどのように『認識の客観性』と関係するののかという科学方法論上の問題がまったく問われてこなかった」。その結果、日本の現代中国研究が「ウォッチング(観察学)に一方向的に偏した」とのご指摘は、“哲学者・加々美”の真骨頂ともいえよう。自らもその構築の一翼を担ってこられた戦後の中国論にあって、さらなる地平を拓こうとされる気概が、改めて感じられる。

草稿をいただいて1年ほどのちに上梓された『鏡の中の日本と中国——中国学とコ・ビヘイオリズムの視座』(日本評論社、2007)にて、中国(を構成する人々・社会)への主観性/主体性を負う研究姿勢を提起された。その実践の場として設立されたICCSで、私は中国の「同学」らと切磋琢磨することができた。加々美先生のご要望により、地元・奈良での合宿を企画しては、日中交流の「現場」で辞書を片手に彼ら彼女らと議論したことも…。

ゼミも、そうしたゆるやかなサークルのような形態であり、私は出稽古・他流試合に出ることが多かったし、加々美先生はそれを寛大に認めてくださった。今日、中国とその研究を取り巻く環境が変わり(件の喫茶店も閉店するなど)、時は流れたが、当時のつながり・交流は今も続いており、またさらに広がっている。そして何よりも、赤池でうかがった日中学術界の対話の重要性は、かつてないほどに高まっている。その本質を見つめ続けられた加々美光行先生のご冥福をお祈りする。

## 未完の文革研究

### —「社会主義」中国の理念を追究した人生—

川村範行

(名古屋外国語大学名誉教授)

加々美光行先生は晩年に至るまで「文化大革命（以下、文革と略す）とは何だったのか」を追究し続けた。先生は、文革を単なる政治権力闘争の次元だけでは見ないで、そこで問われた「社会主義」の理念が未解決のまま終わったと捉えている。文革後の中国の政治の民主化と底流でつながっているとみて、思想的な課題としての文革を問い続けたのである。

加々美先生が文革に注目したのは、1966年に北京で毛沢東によって文革が発動されてから数年後、まだ日本ではその全容までは明らかになっていない時期だった。自著『未完の中国 課題としての民主化』（2016年、岩波書店）には、「1971年3月、毛沢東主義者であるはずの永田洋子らによる連合赤軍の『仲間殺し』が発覚し、毛沢東主義とは一体何だったのかという疑惑が私の心に湧いた。翌日から勤務先の研究所の図書館に籠り、『紅衛兵小報』のマイクロフィルムのリールを一心不乱に回し続け、文革の実態をむさぼるように調べ始めた。アメリカのフーバー・インスティテュートから購入したばかりのものだった」と、研究動機を記している。

その結果、「紅衛兵の武闘は陰惨残虐を極め、（中略）驚くべき暴力が振るわれたこと、多数の死者があったことが目の前の資料からはっきりしてきた」という事実を知り、衝撃を受ける。加々美先生は文革が終焉する1976年に雑誌『現代の眼』に論文『文化大革命の路線とその思想』を発表した。論文では文革の実態を明らかにし、少なくとも40万の死者があり犠牲者が1億人に達することを公表した。

21世紀に入り文革を問い直した国分良成編著『中国文化大革命再論』（慶應義塾大学出版会、2003年）によれば、1980年代前半には、中国において文革に対するそれまでの肯定評価が全面否定へと逆転し、それを裏付ける新たな資料や証言が登場した。「学界やジャーナリズムではかなりの勢力を誇っていた文革賛美論が全面的に退潮しはじめ、徐々に文革自体を遠巻きに眺めるようになっていった」という。日本でも文革肯定論やさらには文革賛美論がまだ幅をきかせていた1970年代において、文革の赤裸々な加害・被害両面から実証的に論じた加々美論文は先駆的であったともいえる。

毛沢東の死後、鄧小平の主導により1981年6月の中国共産党第11期六中全会は「建国以来の若干の歴史問題に関する決議」を採択し、毛沢東による文革の過ちを党として公式に認定した。文革は少なくとも数千万の死傷者、一億人の被害者を出したとされ、文革に対する評価は肯定から全面否定へと一大転換したのであった。しかし、加々美先生は「こうした武闘の陰惨さの一方で、私はなおかつ文革を総否定はしなかった」（『未完の中国』）

と、自身の文革へのスタンスを明確に述べている。この点で一般的な文革否定論者とは一線を画しているのが加々美先生の文革研究の特色であると言える。

加々美先生は、「文革の規模の大きさが権力闘争としての一面を越えて、それ以外の何かを含むものだったことを示している」（同）と捉え、「文革が毛沢東の意図として社会主義体制を防衛するために、当初は根こそぎ民衆意識の変革を目論んだものではなかっただろうか」（同）という「仮説」を立てて、関係者の証言や資料などを精力的に集め、文革を詳細且つ客観的に論じてきたのである。

毛沢東が1966年8月、「司令部を砲撃せよ一私の一枚の大字報」の公表により国家主席だった劉少奇の肅正に先鞭を付けただけで終わらず、紅衛兵、造反派の大衆組織を使ってその矛先を党中央から全国各地の各レベル全ての党委員会の破壊に向けた（「奪権」と呼んだ）ことに、加々美先生は着目した。翌1967年3月までには実際、中国には共産党組織がいったん存在しなくなった。「毛の目的は毛自身の権力基盤である共産党組織を破壊し、それに応じて全国根こそぎで国民意識を変革させることにあった」（『未完の中国』）と、断じた。

文革の本質は「毛の目から見て党組織がプロレタリアの党であることを忘れ、市場経済化に走り貧富の格差を生み出し、資本主義下の道を歩み始めていたから」（同）と捉えたのである。

しかし、毛沢東の理想は実現せず、暗転した。文革は「革命の名の下に他者の人間的尊厳を奪い、時には殺人をも重ねた結果、その精神の荒廃を生み、（中略）加害者・被害者の立場の如何を問わず、彼らを人間でない『けだもの』に変えた。何が善であり、何が悪であるかはそこでは明瞭でなかった。善意が悪意に通じ、理想が悪夢に通じる逆説、その反対もまたしかり」（同）と、加々美先生は冷静に分析している。

ここで、過去の文革研究の傾向を振り返ってみる。

前述の『中国文化大革命再論』によれば、以下の三者に分類される。

（1）文革の性格規定に関する問題。その中には中央指導部内の権力闘争や政策論争として位置づける見方、または毛沢東の官僚主義・特権批判闘争、教育革命、あるいは毛沢東による皇帝支配型の個人独裁などとして捉える観点が存在した。

（2）文革の起源をめぐる問題。1956年～57年の党八期二中全会から反右派闘争を経て徐々に形成されたとするのがもっとも有力だが、それ以外にも大躍進以後の経済調整の過程、あるいはその後の社会主義教育運動などとするものなどが存在する。

（3）紅衛兵運動や労働者の造反運動における混乱や暴力の背景分析から文革の実態に迫るものであり、文革を上層権力からではなく社会の側から捉え直そうとする試みである。

同書は「過去の文革研究の弱さは、あまりにも政治的ありすぎた点にある。文革は『研究』や『分析』の対象であったというより、ある一定の政治的なメッセージの代替であったといったほうが妥当である。それはなにも文革賛美派だけでなく、文革否定派の中にも多く見られた現象である」と、批評している。

同書の文脈に照らせば、加々美先生の文革研究は前述（１）（２）に関して中国共産党の会議や文書、各種資料、証言などを基に重層的な検証を積み重ねた。（３）についても紅衛兵の身分差による「人事檔案」（党委員会保管）争奪をめぐる武闘や、都会から農村への下放体験者の証言など多角的且つ客観的に分析している。その意味で加々美先生は「政治的ありすぎ」ず、「研究」「分析」を丹念に行った上での独自の文革論を追究したと評することが出来よう。

さらに、加々美先生総監修のもと中国人若手研究者、日本人研究者の共同合作で、文革に関する大辞典の日本語版「中国文化大革命事典」（中国書店）が1997年に発刊されたことは画期的であり、先生の功績の一つに挙げられる。

加々美先生は、文革以降の中国の政治民主化運動が文革に“通底”するという独特の視座を持っていた。元紅衛兵の魏京生が1978年末に北京を中心とした「民主の春」運動の中心的役割を果たしたことや、1989年6月の天安門事件では「元紅衛兵が運動に陰に陽に関わり指揮をした」ことを指摘し、「紅衛兵は文革の無政府的な混乱を通じて共産党一党独裁の破壊を経験する中、抑圧を越えた民主の価値を知り、反面、血塗られた武闘の経験も知って、権力の怖さを知り尽くした世代であった」（『未完の中国』）と、捉えている。

さらに、加々美先生は自著『歴史のなかの中国文化大革命』（岩波現代文庫、2001年）で、「最大の問題は、文革が提起した社会主義の理念を巡る問題を未決着のまま、改革開放による高度発展の『近代化』を既成事実化し、なおかつ現状を『中国の特色を持つ社会主義』と主張して現在に至ったことにあるだろう」と厳しく指摘し、「文革の亡霊が今日の中国に徘徊している」とまで揶揄している。即ち、加々美先生は、ポスト毛の中国共産党が十年間にわたり中国全土を混乱に陥れた文革の過ちを総括しただけで、改革開放政策の導入により市場経済化を推進し、その結果、経済大国化した「中国特色社会主義」の本質と矛盾を問いただしているのである。

2013年2月には愛知大学 ICCS シンポジウム「三つの世代を越えて見えて来るもの：文革世代、六四世代、そして八〇后世代へ」が、加々美先生の主導で開催された。先生は開催趣旨として、文革後の改革開放政策に伴う格差問題などを取り上げ、「文化大革命の運動に見られた『差別撤廃』の原理は再びかえりみられねばならない」と述べ、文革によって突きつけられた問題意識を改めて俎上に載せたのである。定年退職間際まで、文革を凝視し続けた視線を文革後の中国にも鋭く照射していたのである。

一方、加々美先生は、1990年代後半から21世紀にかけて日本や中国で台頭してきた排他的民族主義について、「思想精神の空洞化」の視点から捉えた。その精神的空洞化は日本では全共闘世代と70年安保闘争世代の政治運動の「挫折」によって生じ、中国では文革時期の紅衛兵世代の「蹉跌」による精神的空洞化（シニシズム・冷笑主義）から起きたとの仮説を提示している。先生は、領有権問題での日中両国政府・国民の対立を憂えて、「国家と民衆が排他的、自尊的民族主義で合致している状況」の克服を強く主張していた。

加々美先生は日本人の対中観についても懸念していた。自著『鏡の中の日本と中国 中国学とコ・ビヘイビオリズムの視座』（2007年、日本評論社）で「古代中国に対しては尊

崇の念を持ち、（中略）同時代の中国や中国人に対しては、戦前には軽蔑の念を抱き、今日では嫌悪の念を示すという大きなギャップが存在し続けてきた（中略）こうした古代と同時代を二元的に見る日本人の中国観の『歪み』はどこから来たのか」と、この歪みの克服を課題に挙げていた。

加々美先生にとってなお未解決の問いは「中国は文革によってカオスを生み出したが、中国のいくつかの国家に分裂させるカタストロフまではもたらさなかった。それはなぜか？」である。国分良成も「文革に於ける大混乱にもかかわらず、これによって国家や党の体制はなぜ崩壊することなくむしろその後強化されたのか、あるいは決定的な壊滅的被害を被らなかったか」と、共通の問いを提示している。

加々美先生は「文革をどのように『語り継ぐ』か」と問いかけ、「肯定ではなく、単純な否定でもなく、批判的に『語り継ぐ』」（『未完の中国』）と述べている。「熱狂的な国家情念がなぜあれほど短期間に燃え上がったか、責任の所在を明らかにするためにも『語り続け』なければならない」（同書）と、文革の責任論をも問い続けた。

加々美先生の文革研究を「未完の文革」と称するなら、先生の残した問いかけを引き継ぐのが後に続く者の務めであろう。「社会主義」中国を追究し続けた先生の“ご遺志”に報いる道でもある。

最後に、加々美先生の推薦で愛知大学国際中国学研究センター（ICCS）の客員研究員に招かれ、政治外交班の一員として先生の知見に接することができたことに対し、深く感謝の念を捧げたい。  
(2022年6月26日記)

## 加々美先生を偲ぶ

周 星

(神奈川大学教授)

2000年4月より、愛知大学国際コミュニケーション学部へ転職してきた当初、愛知大学の中国研究には自分はおそらく無縁だろうと思っていた。所属の学部が異なるうえにキャンパスも違うからであった。また、日本人の中国研究に少し違和感を覚えたこともあった。ところがある日、加々美光行先生からお電話をいただき、一緒に文部科学省の「21世紀COEプログラム」に申請してみないかと誘っていただきました。以来、加々美先生の情熱に動かされ、次第にICCSの活動に携わるようになった。そのあと、大学院中国研究科の仕事も含めて、愛知大学の「現代中国学」に深く関わり始めた。これらはすべて加々美先生のお陰だった。

加々美先生が2002年11月にICCS訪中団を引率して、中国の関係諸大学を歴訪したことは私の印象に深く残っている。南開大学、中国人民大学、北京大学、中国社会科学院研究生院など、先方の関係者にICCSの理念や抱負を熱く語った加々美先生の姿を見て、その場にいる自分も感動した。両国の若手研究者育成のための夢のような「デュアルディグリー・プログラム」（博士二重学位制度）は、加々美先生の発想とご尽力によって、2004年4月より実現された。現在、この優れた制度が大いに開花したのは、加々美先生の成し遂げた功績が大きい。



国際中国学研究センター発足記念講演会（2003年5月29日）  
ヒルトン名古屋にて

戦後日本の中国研究は、従来の漢学とは異なり、地政学やイデオロギーを背景にしている西側諸国の「地域研究」の一環として位置付けられたが、加々美先生が理想としていた「現代中国学」はそれらの趣旨とは違った。加々美先生の理念は「21世紀COEプログラム」や「デュアルディグリー・プログラム」などによって具現化されたが、それは学術的な表現としては「コ・ビヘイビオリズム」というなじみのない言葉であった。研究対象側の諸主体の主体性と外国人研究者側の主体性を同格なものとして認め、また、両側の主体性の間に相互連動、すなわち共同主観性の存在、さらに双方

の意思・態度も相互連動的な状況にあることなどを踏まえて、中国研究の方法論的パラダイムの刷新を加々美先生は提案なされた。要するに、一方通行的、自己中心的、西側諸国の国益やイデオロギーに左右されてきた「地域研究」とは一線を画す新しい「現代中国学」を作ろうとした。わかりやすく言えば、加々美先生は中国側の研究者や研究成果を認めて、双方の学术交流を通して、日本の中国研究を立て直そうと努力したわけである。このような「現代中国学」だからこそ、私のような日本にいる中国人学者も遠慮なく関わりたいと思う。

加々美先生が開かれた「現代中国学」のさらなる発展を心より期待したい。



## 加々美光行教授を偲ぶ

### —その学問のリアリズムと情熱—

鈴木 規夫

(愛知大学国際コミュニケーション学部教授)

愛知大学を退職されて後も、加々美先生とはしばしば世界情勢をめぐっていろいろ議論する機会に恵まれた。先生の体調があまりすぐれなかったこともあり、体調の良い折に応じて頂戴する電話での対話となるが多かったのだが、いったん議論が始まると、いつもながらのその情熱あふれる語り口は、亡くなる数日前までも健在であった。

さまざまなリソースから得られた情報のリアルな分析もさることながら、そこに常に想起されたのは、先生の皮膚感覚で呼び覚まされた現実認識への直観である。ある意味で、先生の生きた時代は、日本においても中国においても、そうした皮膚感覚を研ぎ澄ますのに実に適した状況があったのかもしれない。遅れてきた私たちの世代には、天安門広場に百万を超える人々が生の身体を賭して政治行動を起こしている現場を体感する機会はなかなかない。しかし、かつてそこにいた明確な記憶とともに、先生はいつも生きた情勢を見ていたのだ。そして、冷静と情熱とのあいだにあって、常にその両方に共感されている先生の姿を、私たちは残像のように追うことになるのである。

皮膚感覚による共感と言っても、現在の大陸の政治体制において日常を生きる人々には時にずれたところもあったかもしれない。「加々美先生にしてもなお、本当の中国人・中国社会について十分分かっているわけではない（ということは他の日本人中国研究者は大概分かるうともしていないという含意なのであろうが）」と漏らす人たちがいても無理からぬことである。とはいえ、先生が常に感応力を以て中国と世界とに向き合っていたことは紛れもない事実であり、それは終生変わることはなかった。

先生は戦後日本に生きる知識人としてのコモンセンスを十全に身につけていたことも、ここで想起しておいた方がよいだろう。市井三郎や竹内好、鶴見俊輔などとの世代を超えた交流が可能であったのもそれゆえである。そして、同世代の知識人たちの中でも、先生の「思考する実存」はユニークな位置を占めることになった。

先生の研究上の柱の一つであった、文化大革命研究においてもそのユニークな位置は示された。「民族問題」の展開との共鳴関係にそれが置かれると、先生の文革研究の独特な位置もより鮮明になるに違いない。さらに中国における信仰の諸問題が絡み合えばますます興味深いことになる（あいにく、私の展開している「イスラームにおける中国」という文脈をご理解頂くには、あまり時間が足りなかったことが悔やまれる）。

というのも、もう一方の柱であった中国研究をめぐるとの諸問題も、実は戦後日本知識人としてのコモンセンスに由来するものであると理解されるからである。先生の晩年の書齋には、かつての「支那学」の諸研究まで遡るさまざまな「学」をめぐるとの文献が遺されていたが、「方法としての中国学」は、終生変わらぬ一貫した課題としてあった。

竹内の「方法としてのアジア」を引き継ぐものとして企図されたであろう「中国学とコ・ピヘイビオリズムの視座」（『鏡の中の日本と中国』）は、ICCSにおける研究のユニークさを引き立てるはずのものであった。だがあいにく、あまり多くの理解者をうることはな

かったようで、先生が所長を退かれてからは更なる探究も難しくなった。先生は、所長の選挙による選出など、少なくとも他の大学研究機関と同等基準での ICCS の制度化と組織化とを盛んに説かれていたのだが、それはまた、国家と民族の境界を超えて問題を抉り出して解決を模索する「コ・ビヘイビオリズム」が常に等身大の「イノチ」に基づくという理念とも繋がっていた。そうした「コ・ビヘイビオリズム」という社会科学的研究の方法論的概念の創出は、研究共同体を構築し、新たな研究潮流を構築していくには必要欠くべからざるものであった。「コ・ビヘイビオリズム」概念は、英国学派再考の文脈でバリー・ブザンが「面子」概念を展開し、中国のいくつかの大学の世界社会理論研究の一角に影響力を及ぼしたのと同様の現象をもたらさずであったが、残念ながら実現しなかった。

加々美先生の許での「コ・ビヘイビオリズム」概念の実践的拡張の機会、実は他にもあった。ICCS 政治外交班で先生と共に共同研究を続けていた折に、班員であったロー・スクールの浅井正教授（当時）の伝で、2010年9月7日に発生した「尖閣諸島中国漁船衝突事件」再検証のため、事件当時菅直人内閣官房長官であった仙谷由人氏および当時の関係者数人に、2013年から何回かヒアリングする機会があった。政権内部の経過を当事者自らが語る内々の会合と、そこにおける先生の鋭い指摘は実に印象的であった。

その際、対外的な安全保障と権力との関係を語る文脈において、北村滋氏の名前が仙谷氏の口から出たことがあった。それを機会に政治外交班の研究方向に日中間のインテリジェンス・ファクターを重ねていくこともありえたのだが、先生の問題もあって、残念ながらそうした展開とはならなかった。日中関係を鏡像的關係にとらえた上で拡張される「コ・ビヘイビオリズム」概念とインテリジェンス—この魅力的な研究方向は私に遺された宿題の一つとなっている（実に1920年代日中関係を考える方法論としてもこれは再検証されて然るべき課題であろう）。

言うまでもなく、北村氏は徳島県警本部長時代に地元選出の仙谷氏から高く評価され、その強い意向で2011年12月に民主党政権の野田内閣において内閣情報官に起用されて後、自民・公明連立政権の安倍内閣でもインテリジェンス関係の要職にあり続け、国家安全保障局長となった人物である。この仙谷氏と北村氏との因果をどう考えたらよいものか、先生といつとも不思議がっていたのだが、現在に至るまでも謎のままである。

先生が情勢をとらえる皮膚感覚を大事にされていたことと、思い立ったらすぐ中国へ飛んだフットワークのよさとは相即していた。透析を始められてからは、さすがに西部地域まで脚を伸ばすことは難しかったものの、上海、北京へはたびたび渡航されていた。私は上海へ同行することが多かったが、復旦大学の臧志軍先生や徐静波先生などが透析のための病院の按配を快く引き受けてくれた。

先生は上海をどのような都市としてとらえていたのか、実は私にはまだよく分からないところがある。香港は明らかに先生にとって青春の地でありすべてが開花した都市であったことに違いはなく、また北京は中国政治観察の認識枠組みに必須ファクターとして組み込まれていたことは明白なのだが、上海はどうであったか？ 少なくとも「東亜同文書院記念センター」から発行されていたものに現れた先生の記述からすると、やはり、どこかでかつての「左翼・上海」を喚起するベースがあったのではないかと思われてならない。東亜同文書院の歴史的位置付け自体、それを抜きにしては語れないからである。

堀田善衛の『上海日記 滬上天下一九四五』が上梓された時に水を向けたところ、あまり明確なご意見を述べられなかった。現在 R.ゾルゲや尾崎秀実などの上海での活動に関する新資料がアレクセイエフやフェンションなどにより紹介されていることもあり、川合貞吉や尾崎秀樹に惑わされてきた世代である先生とは、是非じっくり語り合いたかったところなのだが、じきに私も旅立つあちらでの愉しみにとっておくことにしよう。

## 恩師・加々美光行先生への感謝

—加々美ゼミの思い出とともに—

武井 義和

(愛知大学 ICCS 客員研究員、愛知大学国際問題研究所客員研究員)

加々美光行先生の訃報に接してから、悲しみとともに、もっと先生のもとでしっかりと研究するべきだったという後悔の念を強く感じています。

私が加々美光行先生に初めて出会ったのは、1997年4月、愛知大学大学院中国研究科博士課程に進学したときでした。修士課程で戦前の上海における日本人居留民社会を研究していた私は、さらに違った角度から研究してみたいと考え、戦前上海の朝鮮人居留民の実態解明をテーマに据え、加々美先生のご指導を仰ぐことになったのでした。

その年は毎週月曜日午前に豊橋キャンパスにあった大学院棟の1階でゼミ指導を受けました。ご公務で取りやめになることもありましたが、ほぼ一対一で授業が行われ、濃密な時間を過ごしました。それを通じて、私は研究方法や目的が如何に拙いものであったのかを大いに痛感し続けました。それは必然的に、理論面を中心とする研究内容を常に見直し、再構築するという作業にもつながり、その後も博士課程に在籍する間、ずっと私に付きまとう課題となりました。

次の年から加々美ゼミは現在のみよし市にあった名古屋校舎が開催場所となり、博士課程と修士課程の院生が一つの教室に会するようになりました。ゼミ生もかなり増え、私が研究対象とする歴史だけでなく、現代の政治・外交など中国に関するさまざまな研究テーマの発表と、それに対する議論が盛んに行われるようになりました。ときには名古屋校舎を飛び出し、愛知県から車に分乗して京都まで行き、お寺で合宿を行うということもありました。当然、ゼミ生同士の交流も公私ともに盛んになり、そのなかには現在に至るまでご縁が続いている方も多くいます。

しかしながら、研究面はといえば依然として試行錯誤が続き、ゼミ発表もしっかりとしたものができず、内心悶々とした日々が長年続きました。ですが、非常に時間がかかりながらも、2006年3月に博士学位(中国研究)を取得することができました。

私が博士学位を取得できたのは、ゼミ仲間のアドバイスがあったからであり、そして何よりも、加々美先生のご指導を受け続けることができたおかげです。なかなか進歩しない私を最後まで厳しく、温かく見守って下さったおかげです。もし加々美先生に出会わなければ、そして加々美ゼミで学ばなければ、今の私は存在しません。

加々美先生はもうこの世にいらっしゃいませんが、先生からいただいた多くのアドバイスをまとめたノートは今も見返すとともに、取り組んできた研究をさらにまとめていきたいという思いを常に抱いています。今後も自分の研究の進歩に努力していきたいと思いません。

ここまで私を育ててくださいました恩師・加々美光行先生に厚くお礼申し上げますとともに、ご冥福をお祈りいたします。本当に有難うございました。

## 加々美先生の思い出

馬場毅

(愛知大学名誉教授、元 ICCS 所員)

加々美先生と私は同年齢であり、加々美先生のご逝去のご連絡を受けたときは、他人事ではなく大変衝撃を受けました。加々美先生とお知り合いになったのは、まだアジア研究所にお勤めの時で、短い間でしたが、研究会を一緒にしたこともありました。加々美先生は話好きで、喫茶店などで雑談の時でも熱心に、今とりかかっている研究テーマを話されていました。

その後愛大法学部に移られ、現代中国学部を創立に尽力され、1997年学部創立とともに学部長となられ、私も愛大に採用され、勤務先を同じくすることになりました。加々美先生は、学部創設や研究所創りに関して、極めて独創的な構想力があつた方だと思います。現代中国学部のような、中国だけを対象とした一つの学部の創立、その中では現地プログラムのような対象地域である中国に行つて、中国を実見しながらの南開大学のネイティブの教員による語学教育、中国現地での学生による調査研究(かつての亜同文書院の大旅行の現代中国の状況下での変容版)、就職準備としての現地インターシップの実施など当時他大学に類似なものがない独創的なものであり、その実践過程を、身近に見聞したり自らも直接携わつた経験は、大変貴重なものでした。また文科省のCOEプログラムに選定された国際中国学研究センター(ICCS)構想は、日本の中国研究を日本だけに留まるのではなく、何よりも対象である中国との対話の中で、国際的に位置づけようとする試みであり、中国の大学の大学院博士課程とのデュアルディグリー制度(二重学位制度)は、中国の教育機関との国際的な中国研究者養成の試みだつたと思います。

研究の面では、今ほど中国政府の民族政策が問題にされてない時期から、資料的限界がありながらも民族問題の重要性に発言されていたのは、先見の明がおありだつたと思います。また文革について、現在、暴力を伴う中共の大衆動員、あるいは1930年代から続く過酷な党内闘争史の視点からの研究が多い中で、文革開始時にその理念が世界に与えた衝撃を研究の中に落とし込んで、その後その実態が明らかにされ、中国で否定されても衝撃の意味を通底低音として維持され、文革の中で出てきた「出身血統論」批判の問題等の研究をされてきたと思います。このことは日本の中国研究者や評論家の多くが、その理念に賛同し、文革を評価していたのに、その後実態が明らかになると、一切沈黙してしまつたことと好対照であつたと思います。

以上加々美先生のご逝去に際し私の思い浮かぶことを記し惜別の言葉とさせていただきます。

## 加々美先生を取材して

### —研究者とマスコミの役割—

平岩勇司

(中日新聞元中国総局長、現文化芸能部長)

加々美先生がアジアへの研究を志した原点は、小学一年生の時だったという。仲良しの友人が、その父親に殺害された。在日朝鮮人の親子で、「背景に差別と貧困があることを子ども心に感じた」。東大を卒業後、アジア経済研究所へ。中国担当となり、生涯にわたり中国と付き合い合っていくことになる。

2005年には、中日新聞社が文化面で多大な貢献をした方に贈る「中日文化賞」を受けていただいた。冒頭の先生のお話は、その時の取材でうかがったものだ。物腰は柔らかいが、ぶれない信念を持ち、力強さを感じる方だった。

昨今、中国を専門とする研究者の間で、ことさら「中国の脅威」を強調するタイプが増えている。最初から中国を「敵」とみなし、今にも軍事行動を起こすかのような主張までする。

加々美先生は常にその対極にあり、中日新聞でもたびたびコメントをいただいた。

「中国の太平洋での軍事力強化は、中国を仮想敵とした米国のミサイル防衛や日米同盟への対抗策だ。中国の軍拡を止めるには、日本が『核なき世界』を目指すオバマ米大統領と中国の双方に軍縮を働き掛け、沖縄の米軍基地縮小につなげることを目指すべきだ」

(2010年5月14日付特報面)

その一方、強権的な政治手法が目立つ習近平政権に対しても「経済や軍事を中心とした大国化では、魅力ある中華文明を取り戻せない」と警鐘を鳴らした(15年2月18日付愛知県内版)。中国の立場を理解し、その上で中国にも物申す一。研究者として、一人の日本人として、ぶれない姿勢を貫かれていた。

マスコミに目を向けると、かつて中国特派員の多くは、根っこに中国の歴史や文化、思想への憧憬があった(私は三国志が入り口だった)。多かれ少なかれ、侵略戦争に対する認識も持ち合わせていた。最近是中国報道の注目度が高まる一方、中国への思い入れが少ない特派員も増え、頭から中国を「敵」とみなすような報道も目立っている。

相互不信を煽る視点から、生まれるものは何もない。以前は日中両政府が対立しても民間交流は別という複層的なつながりがあったが、今や国民一人一人が政府の代弁者のようにふるまい、中国批判を口にするようになった。こんな時代だからこそ、「本音をぶつけ合い、最後は涙を出して抱き合う。日中双方でそんな人材を育てたい」とおっしゃっていた加々美先生の言葉が思い出される。日中両国が良き隣人、良き友人の関係を築くため、研究の世界でも報道の世界でも、先生の遺志を受け継ぐ必要があると強く感じている。(中日新聞・平岩勇司)

## 「不肖の弟子です」

—自由にやらせていただいた加々美ゼミの三年間—

堀田 幸裕

(霞山会主任研究員／愛知大学国際問題研究所上席客員研究員／上智大学非常勤講師)

自分の研究人生には三人の「師」がいる。一人は愛知大学文学部史学科東洋史専修時代の指導教員である谷口規矩雄先生、もう一人は筑波大学大学院人文社会科学研究科博士課程時代の指導教官である古田博司先生、そして愛知大学大学院中国研究科修士課程時代の指導教授である加々美光行先生である。三人とも専門もさることながら個性や志向もそれぞれ異なる方々だったが、指導の厳しさで言えば谷口先生が一番印象に残っている。

東洋史では卒業論文が必修であったが、谷口先生のゼミでは担当回にちゃんと準備せず報告に臨むと、畳みかけるように不備を指摘されて何をどこまで調べたのか淡々と追及される。そして言い逃れができないところまで学生が追い詰められてから、ようやく正解を説明して下さるというスタイルだった。先生が師事された京大の宮崎市定ゼミの雰囲気を受け継いでおられるようなのだが、学生たちは前日夜から徹夜の勢いで大漠和をはじめ工具書を引いたものである。卒業論文の口頭試問でも、入室後に沈黙が流れる張り付いた空気の中で「君はもう少しやってくれると思ったのに」とこぼされた一言に愕然としつつも戦慄したのを覚えている。古田先生については紙幅の都合で詳述しないが誠に厳しい方であり、師弟の関係性を含め原稿の書き方など熱意ある指導をいただいたのが懐かしい。

一方で、加々美先生からは怒られた記憶が一度もない。小生が鈍感ゆえ、叱られているのに気が付かなかったという可能性もあるが、ゼミ発表や修士論文の口頭試問とも緊張感を伴うムードは皆無であった。とはいえ従順さの欠片もない若かりし小生は、ゼミ内の「確信犯的右派勢力」と他称されていた法学研究科の先輩たちとともに、何かと先生の発言に食って掛かっていた思い出が多い。加々美先生にとっては「面倒くさい学生」だったのだろうと、今思えば汗顔の至りであるが、そんな私たちにも先生はいつもにこにこしつつも泰然自若として持論を交えつつ、相手の話にもきちんと応答してくる寛容さを持っておられた。加々美先生がよく利用されていた赤池駅近くの喫茶店「青春は最後のおとぎ話」で、二回ほど長い議論をしたはずなのだが、残念ながら詳しい内容を記憶していない。

最後にお会いしたのは2016年2月、ご自宅のある東所沢のモスバーガーだったが、習近平政権下の中国は（加々美先生がおっしゃるような）従来の常識でとらえられない方向に向かっているのではないかという私の挑発に対して、静かに首肯されていたのが印象に残っている。その際に、これからはかつての教え子たちと連絡を取って色々意見を交わしたいのだと話されていたが、お体のこともあり叶わなかったのが惜まれる。

少し個人的なことを述べると、元々小生は「研究をしたい」という明確な動機があって大学院へ進学したわけではない。就活に悩み、進路が定まらないまま結果として文学部か

ら中国研究科へ進学した。本来の筋としては、学部の指導教員である谷口先生に相談すべきなのだが、歴史よりも現代政治に関心があったので研究室によくお邪魔していた嶋倉民生先生に事情を相談して、加々美先生をご紹介いただいたという経緯がある。そして1999年の1月だったと記憶するが大学院試験前にご挨拶に行き、卒業論文を渡して文化大革命について専門を深めたいと申し上げた。この時まで加々美先生とは全く面識がなく、実は面会までに先生のご著作をちゃんと読んでなかったためこれを突っ込まれ、後にゼミの先輩から聞かされることになるのだが「失礼な子なんだよ」と、私のことを評されていたという。大学院試験も散々で、語学に至っては一番できている学生と\*\*点（二桁スコア）も差があったと面接で指摘される始末だった。けれども、卒論の内容をかなり評価してくださっていたらしく、無事1999年度入学の修士過程学生として、加々美ゼミへ入門することができた。ゼミ生としての態度は先述の如くで、ある意味で非常に自由にやらせていただいたという点を個人的には大変感謝している。加々美先生の下であったからこそ、私は研究活動の楽しさに目覚め、また先生の影響で実地主義を心がけるようになったのだろう。

残念ながら私は加々美先生の学恩に報いることができないまま、修士課程を終えた後で筑波大学大学院へ進学して、中国研究から北朝鮮研究に専門をシフトさせていくのであるが、先生とのご縁はこれで終わらなかった。私が筑波大院の博士課程を中退後に就職したのは、東亜同文書院を運営していた東亜同文会の後継団体・霞山会である。この就職自体



は古田先生からのご紹介であって加々美先生とは関係ない。だが偶然にも、加々美先生は霞山会で監事の任についておられた。平職員の私は理事会对応などに関わっていないため、先生と直接的に接することは無かったが、元指導教授が外部役員をされているというのは多少なりとも心強く感じるものだった。一度、小生の担当する業務の講演会で加々美先生にご登壇いただいたことがあったのだが、その時はなぜか流れ

加々美ゼミでは毎年必ず合宿があり、奈良・京都方面が先生の好みもあってよく選ばれた。写真は1999年3月、奈良。前列左から邵倫（現三菱電機）、武井義和（現愛知大学国際中国学研究センター客員研究員）、田宮昌子（現宮崎公立大学教授）、山岸健太郎（現中京大学非常勤講師）、二列目左から加治宏基（現愛知大学教授）、磯部美里（現国際ファッション専門職大学准教授）、後列左から故・佐藤進（JETROハノイ事務所調査員）、和田英穂（現尚絅大学教授）、小生。

で終了後に先生の東大時代のご学友（当時、某大手食品会社会長）とのプライベートな会食にご相伴あずかるという光栄に浴したのも、大事な思い出である。

2022年7月16日の偲ぶ会では、献花の際に「不肖の弟子でした、安らかにお休みください」という一言が心の中で自然に出てきて、先生との永訣となった。



## 加々美光行先生を悼む

李春利

(愛知大学国際中国学研究センター所長・経済学部教授)

2022年05月20日 (金曜日) 中日新聞 D版 00 夕刊文化 5ページ

### 加々美光行先生を悼む

日本の中国研究と政治学研究に多大な貢献をした加々美光行愛知大学名誉教授が逝去された。『逆説としての中国革命』『歴史のなかの中国文化大革命』など多くの著書を執筆し、特に文化大革命に対する歴史や政治、外交などの多面的な実証研究は高い評価を得た。

研究者として優れているだけでなく、後進の育成に熱心だった。一九九七年には、日本初の中国研究専門学部として愛知大学に創設された「現代中国学部」の初代学部長となった。「自分の手で相手を量ろうとすると必ず誤解が生まれる。日中双方の人材を育てたい」と力説し、中国天津市にある協定校の南開大学に「南開愛大会館」を設立。学

李春利

部の二年生全員が四カ月間留學するなどの現地主義の教育体制を確立した。

三年になると中国でフィールドワークを行い、各地の提携校で中国人教員と学生の前で調査結果を発表することも義務付けた。「日本人と中国人が本音をぶつけ合い、最後は涙を出して抱き合う。この体験がその後の研究に生きる」とその意義と現場の熱気を語っていた。

二〇〇五年に長年の研究が

### 日中の人材育成に尽力

評価され中日文化賞を受賞すると、副賞の二百万円を額寄付して〇八年、中国湖南省衡陽県台源鎮に「中日友好東昇小学校」を設立した。十二人きょうだいの末っ子の加々美先生は、日中戦争に従軍した次兄がこの地で戦死してい



2005年、愛知大学国際中国学研究センターと中国・南開大学の合同シンポジウムで講演をする加々美光行さん（中国天津市の南開大学で（愛知大学提供）

学校設立の際に現地に同行した中国人の教え子によると、加々美先生は「悲劇を二度と繰り返してはいけない」と語っていたという。

愛知大学は一九〇一―四五年に上海にあった東亜同文書院大学をルーツに持ち、中国研究と現地教育に長い伝統をもっている。その伝統を継承する加々美先生は「学生だけでなく研究者の育成も必要」と、二〇〇二年に創設した国際中国学研究センター（ICCS）の初代所長となった。彼は中国や欧米、アジアの

### 「中国観の歪み」生涯向き合う

研究者と共に現代中国学の研究を進めるとともに、最近の日中関係について「相互理解がいっそう困難となっている」と深い憂慮の念を抱いていた。

代表作の一つ『鏡の中の日本と中国』では、「古代中国に対しては時には尊崇の念をもち、（中略）同時代の中国や中国人に対しては、戦前には軽侮の念を抱き、今日では嫌悪の念を示すといった大きなギャップが存在し続けてきた」と指摘。「古代と同時代とを三元的に見る日本人の中国観の『歪み』はどこから来たのか」と訴えた。

彼は長い闘病生活を続けながら、「日本人の三元的な中国観」を克服する道筋を示すべく、生命の炎が燃え尽きるまで日中関係の研究を怠らなかつた。

「春蚕死に到りて糸方に尽き、蠟炬灰と成り涙始めて乾く」（春の蚕は死ぬまで糸を吐き続け、ろうそくが燃え尽きて灰になるまで涙を流し続ける）。唐代の詩人である李商隱の名詩を、求道者としての加々美先生に捧げたい。謹んでご冥福をお祈りいたします。合掌。

（リ・しゅんり）愛知大学国際中国学研究センター所長・経済学部教授

\*加々美光行さんは4月22日、78歳で死去。

## 追憶加加美先生

鮑麗達

(天津工業大學 講師)

2022年5月4日在愛知大學同窗會的微信群裏得知加加美教授於4月22日去世，感到非常震驚和意外！腦海裏回憶起我們這一級與加加美教授初次見面的場景，先生慈祥的音容笑貌宛如在眼前。2015年10月加加美老師專門從東京到名古屋的車道校區給我們上了一周的課，我們2015級雙重學位班應該是先生上過課的最後一屆吧，之後據說由於身體原因他就沒有再給雙重學位班的學生上過課了，其實給我們上課的那個時候他的身體也已經很虛弱了，但仍然拄著拐杖堅持來給我們上課，先生見到我們非常高興、親切。

當時先生給我們講課的內容是《現代中國學的新範式》，每次上課都充滿笑容，由於身體原因，上課的時候先生的聲音也是氣若遊絲，但講到學術問題時，表情又非常認真嚴肅，



(右一為作者)

讓人感受到這位外表瘦弱的老人內裏的剛毅以及對學術態度的一絲不苟。先生給我們講他的人生經歷，他對“文革”的看法，他的觀點可以說讓當時的我們都耳目一新，開始認真思考他所談到的一些問題。在講《現代中國學的新範式》中，他提倡用“國別學”來取代“地域研究”所指的諸國研究，比如中國研究應稱為“中國學”，並且提出要確立這種國別學需要以“共同的態度性”來進行研究。這就好比要了解一個人，首先應該成為他的朋友，與他相處，才能更好的看到他身上的優缺點，

才會了解他的處境；設身處地，換位思考，才能更好的理解他的行為方式及形成這種行為方式的原因，得知他的發展歷程。

我想，加加美老師正是帶著這樣的態度，一直致力於中國學事業，不斷地推進中日友好事業。感謝加加美老師！其實在群裏得知先生去世的消息時，還沒有真正地意識到這位慈愛的老先生已經離我們而去，或是內心還不相信不願意相信這是真的，直到遠程參加7月16日追悼會，聽著悲哀的送別樂看著現場的人們依次獻花，才深切地感到加加美老師真的已經離我們而去了！我想，如今只有盡自己所能學好、做好“中國學”事業，致力於中日友好、共同進步就是對老師的最大告慰吧！永遠緬懷加加美老師！

鮑麗達 南開大學——愛知大學博士雙學位課程十二期生（2015年入學）

## 先生的微笑 先生的学识

### —纪念加加美先生—

陈芳

(上海立信会计金融学院 副教授)

听到加加美先生去世的消息，一瞬间，我感到有一点突然，转而由衷地敬佩先生这些年坚韧不拔地与疾病抗争的毅力，也让我对生命的意义有了更深一层的理解。

于是，我的脑中立即浮现出加加美先生的微笑，这是先生发自内心的一种微笑，里面有关爱，也有智慧。当然，先生的微笑是有原则的，错误的、虚假的、非正义的时候先生决不微笑。更多的时候，先生的微笑是谦和的，先生的微笑是和蔼的，先生的微笑是恬静的；先生的微笑伴随着轻声慢语，润物无声。带着这样的微笑，先生离去了，请先生在天堂上安详如常。

加加美先生视中国学研究科为珍宝，也视每个中国研究科的学生为宝贵的孩子，所以，每个中国研究科的学生都能感受到来自先生一视同仁的关爱。尤其令我们感动不已的是，先生



2006年11月27日加加美先生带领中国研究科学生去京都看枫叶时摄影留念

不管身体状况如何，都会坚持带领每届中国学生到京都看枫叶。我只是先生众多学生中普通的一员，因不善于对长者表达敬慕，又因见面的机会有限，所以没能告诉先生这样一句表达对他印象的话，那就是：先生的中国学识很渊博。此印象形成于刚来爱知大学不久之际，起因于听先生讲课，当讲到中国的一个典故，先生说得头头是道，滔滔不绝，这并非先生的专业知识，但看得出这是先生对中国文化的热爱而多年积累的结果，我当时为自己学识的不足而恨不得钻到地缝里，惭愧的心情好久不能释怀，从那时起心中暗下决心要认真地向先生学习。

今天，我对先生的追思就凝集这两点：先生的微笑，先生的学识。

陈芳 中国人民大学-爱知大学双学位课程二期生（2006年入学）

2022年7月21日

## 加加美光行先生的学思与风范

### —兼评“现代中国学方法论”的意义—

耿子洁

(北京建筑大学 教师)

#### 一、追忆加加美光行（1944-2022）老师的言传身教

有幸于2014年结识德高望重的加加美光行先生，记得住在名古屋的那一年，加加美光行先生以他和蔼可亲的笑容，开诚布公的良善，和其巨大的人格魅力征服了我。记得先生体弱多病，一次他原本想和我们一起去白川乡合掌村参观，但因出发前在餐厅门口滑了一跤，不得已住院治疗，无法与我们同行。记忆犹新的是和几位同学一起去医院探望先生时，他亲切和蔼的笑容让我们如沐春风，可惜在病榻前不方便留下合影。德行之光一直萦绕着这位谦虚、淡然的长者。宽和、从容的另一面则是先生绵里藏针，治学严谨、深刻。

记得第一堂课加加美先生就直接谈起犀利的话题，可谓是“哪壶不开提哪壶”，在日中关系中老人以自己的血亲战死海外、客死他乡的经历，表达了对中国人民的同理心与友善关切。他说，有些日本人对中国人有偏见和优越感，但其实日本社会发展的过程中也经历了陋习除弊才慢慢呈现了某种成熟的形态。这些虽然是细枝末节或微不足道的个人记忆片段，但确实是刚刚出国，经历 culture shock 的我们真正关心的问题。《道德经》云“不言之教，无为之益，天下希及之”，赴日留学的意义正透显于这些点点滴滴的小事中，而不是存在于宏大叙事与抽象理论的学科体系中。记得先生在第一课听自我介绍的发音，把我的名字备注成了“高志洁”（日文里“高”与“耿”同音），现在回想起来仍觉得这个意外得来的名字寓意很好。斯人已逝，只能以这些零星散落的记忆碎片聊表敬意与缅怀之情。

作为爱知大学现代中国学部的创始人，加加美光行先生尤其注重的是探索现代中国学的研究方法论。与之共同关注相关领域的方法论的日本学者主要有竹内好、沟口雄三等，在这三位的比较与对话中，也许我们能真正领悟加加美光行先生学思见地的独到之处。

#### 二、竹内好（1910-1977）、沟口雄三（1932-2010）对于方法论问题的论述

竹内好在《何谓近代》（1948年）、《近代的超克》（1959年）与《作为方法的亚洲》（1960年）等代表作中展露了其中国论的方法。竹内好更多的是以自己的思想建构了一个理解“前近代——近代——近代的超越”的模式框架，他认为中国以“回心型”创造出新的自我，开创了不同于欧洲的近代化之路。因此，他的基本立场是借鉴中国的近代化，批判日本明治维新以来脱亚入欧的近代化道路。如果说中国“回心型”的近代化是出自中国强烈的自我保存愿望的展现，日本则是走上了不断放弃自我以适应外部环境的“转向型”的近代化道路。竹内好作为批判西方构建的“东方主义（Orientalism）”的先锋，率先洞察到“东方主义”的方法论弊病，批判其以欧美世界居于“主体”位置，从而对亚非拉世界处于优越地位，视亚洲世界为“客体”。

沟口雄三在《作为方法的中国》（1989年）里质疑竹内好思想模式的主观性，因而主张克服竹内模式，不能将之实在化或实体化，更不能以这个固定框架或图式作为研究范式而推广到现代中国学的研究领域。他质疑竹内好以来的，以中国为媒介的对日本“近代”的批判

是否走向了另一个极端，成为了“极端中国本位的主张”。沟口雄三提出的“作为中国的方法”既反对没有中国的中国学(日本汉学)，也反对埋头各式各样的方法论，以至于忽略了中国这一研究对象本身。他提出的“以中国为方法，以世界为目的”，是将中国和欧洲都作为构成世界的要素，而不是传统意义上以欧洲模式为普遍法则来衡量中国，从而提出“以世界为方法，以中国为目的”的中国学。沟口雄三提出的另一种中国近代的设想，是以历史的纵横交错之处为坐标轴，更重视内发的纵向的机制。他多年来致力于建构区别于传统“冲击—反应”模式的“另一个”中国近代史，对于中国“鸦片战争近代史观”，他试图完成一种亚洲视角的重构叙事，因此他关注到了“民间性空间”这一概念。

对于历来有诸多争议与探讨的竹内好和沟口雄三的方法论，加加美先生在《现代中国学方法论》中，就二者的立场与方法论曾展开过精彩的对话与评论。

### 三、加加美光行对于“现代中国学方法论”的反思及其意义

加加美先生认为竹内好的方法论是主张“在现在的日本中看现代的中国”，同时也强调“在现代的中国里看现在的日本”，竹内好试图在中日两国间建立起在对方内部观察自己的“共同主观性”构造，这将研究的主客体定位在被镜子映照出的“等同”关系，虽然对克服“东方主义”偏见有一定的作用，但难以从根本上颠覆中日两国之间以及亚洲与欧美之间长期存在的“共同主观性”偏见（即欧洲模式对亚洲世界的优越感）。同时，加加美先生指出，沟口雄三一方面批评竹内好的中国论——以批判日本的现代性为目的，而不关心中国的现代化进程的客观真相——实际上还是日本论，沟口的这一观点有失偏颇。另一方面沟口雄三认为只要纵向的内发性力量强大，即使中国的现代化接近欧美模式，并可以克服“东方主义”的被动性，沟口的这一观点似乎过于乐观。对于前者，加加美先生认为虽然竹内好的现代中国论像沟口雄三批评的那样，过度美化了中国的现代化进程，但有其正当性，因为竹内好的研究不能改变中国社会这一居于“主体”地位的研究对象，才致力于通过改造日本社会来实现影响日本对华政策的目的。对于后者，他向沟口雄三发出了这样的疑问：纵向的“内生型现代化”能否承受欧美的“外压式现代化”压力？他指出竹内好与沟口雄三的根本区别在于：竹内好虽然承认东方进行着内发型现代化的尝试，但这种尝试是面对欧美的外压型现代化压力而展开的，面对的则是现实里绝望的“失败”，而非沟口雄三乐观预期的胜利。

加加美先生认为竹内好方法论的本质并非是要跳出欧洲现代化的框架，而是置身其中并持续进行尝试。最终目的在于通过持续努力，摆脱由欧美自我实现和自我扩张的现代化所搅动起的“文明的漩涡”，从而挽救被忘却的和被割裂的等身大的世界，进而由“自我丧失”走向“自我回归”。1997年日本爱知大学成立了“现代中国学部”，这是日本乃至世界首个以“中国”命名的院系，加加美先生研究“现代中国学方法论”的目的在于回应“认识的客观性”问题，即如果科学研究不能脱离目的性的价值判断，那么如何将目的性价值判断和意识形态与“认识的客观性”相结合，探索出具有科学性的现代中国学研究方法，就成为建立新中国学的主要任务。其意义在于：第一，可反思混同了“研究者的目的性价值判断”与“对研究对象的因果分析”的弊端导致的研究者为了适应目的论而进行因果分析，从而丧失价值中立立场。第二，明确了竹内好提出的问题仍具有现实意义的迫切性，虽然竹内好本人对其独自的问题意识未能进行充分的实践并给出可行的答案，但其思考正是爱知大学成立现代中国学部的学术背景，作为现代中国学部创始人的加加美先生的远见卓识可见一斑。在此，以学子之情，致为中日两国学术界做出独特贡献，为“培养维护世界和平的国际型人才”的加加美先生安详，谦和温润永世。

耿子洁 中国人民大学-爱知大学博士双学位课程十一期生（2014年入学）

参考文献:

- (1) 加加美光行《现代中国学方法论》，爱知大学 21 世纪 COE Program,2006 年。
- (2) 沟口雄三《作为方法的中国》，生活·读书·新知三联书店，2011 年。
- (3) 代田智明《论竹内好——关于他的思想、方法、态度》，《世界汉学》第一期第 64 页-第 73 页。

## 不灭的灯塔

—悼念恩师加加美光行先生—

李汉卿

(华东政法大学政治学与公共管理学院 副教授)

2022年是不平常的一年。身居上海的我，元旦之日有幸能与加加美先生远洋通话，通话中先生仍在关心我的生活，还讨论了中日两国的新冠疫情以及询问我的研究状况。与先生通话后，倍感踏实，因为2021年元旦通话没有接通。时隔两个月，3月初上海突发的新冠疫情让整个城市进入了静默状态，我自己被封学校十天以后终于也得以回家继续封闭。然而，仍在封闭中的我于5月初得知加加美先生已于4月22日仙逝的消息，心中十分悲痛。一时间感到了作为个体的我们面对生命的无常是多么的无力！但是面对先生的离去，心中又升腾起一股信念：不能妄自菲薄，在荆棘的道路上要积跬步以致千里。

逝者如斯！我是2008年4月被爱知大学—中国人民大学—南开大学双学位项目录取的，当时正在中国人民大学攻读政治学博士学位。看到招生简章上加加美先生的介绍，加之我学习的外语为日语，所以就毅然地报名了此项目，之后经考试合格被顺利录取。在爱知大学大学院，我的专业是现代中国学。说实话，刚开始时对这个专业有些懵懂。但是，这个专业是日本研究中国问题的著名学者加加美先生开创的，所以我带着非常荣幸的心情专攻此专业。

2008年4月份入学后，我们在人民大学利用远程系统接受爱大教员授课，所以是通过网络与加加美先生初次见面的。虽然我通过网络看到加加美先生身形瘦弱，但是先生讲起课来却是滔滔不绝，而且不需要看教案。更令人惊讶的是，先生的汉语非常好，本来我想借此机会向先生多学习日语的。后来到了日本，和先生聊天时才知道，先生的汉语是自学的。对此，我非常佩服！

当年9月份，南开大学和中国人民大学的学生一行十人如期飞到了日本名古屋。出身农村的我，这是第一次坐飞机，第一次出国，所以非常激动，也非常珍惜在爱知大学学习的这一年。见到先生是在爱知大学三好校区（现已搬迁）的国际中国学研究中心(ICCS)。目睹先生真颜，着实高兴！他是位和蔼可亲的长者，又是一位可尊可敬的师者。在爱大学习期间，我选修了先生的多门课程，其中现代中国政治专题课只有我一人，专题课也就成了先生和我深入交流的时间。在先生的课上，我知道了竹内好、内藤湖南、丸山真男、天儿慧、毛里和子等当代日本学者，也深入了解了艾思奇、李慎明等当代中国政治学者的思想。此外，先生还邀请金观涛、许纪霖和臧志军等知名学者授课或开讲座，这些都拓宽了我们的研究视野。

先生最初是研究文化大革命的。之后又拓展研究范围，其范围涉及中国民族与边疆问题、中国现代化问题、中国政治思想、中日关系问题等。无论研究何种问题，先生都坚持以打破以西方为中心的东方主义，以平等、主客观一体进行国家之间和国内事务治理的探讨为原则，也即“共同态度性”。这也是先生开创的现代中国学研究范式的核心，也是被称为现代中国学与欧美中国学的不同之处。这种研究范式的提出，是基于先生对欧美中国学的深刻反思，也出于他对中国发展的关注之情怀，以及对促进中日文化平等交流、互相理解、共同和平发展的执着。

在与先生交谈过程中得知，先生的一个哥哥在衡阳会战中战死，为了弥补哥哥的过错，先生在衡阳市捐建了一所希望小学；据先生说，当年他坚持南京大屠杀的历史观点和揭露日本侵略中国的行径，曾经受到过日本右翼分子的子弹威胁。可以看出先生的正义之感和良知。

先生有着强大的人格魅力。据先生说，他从二十几岁起就开始和肾病作斗争，为了不熬夜损害身体，他坚持在二十多年间，每晚九点就寝，凌晨四点起床工作，可见先生之毅力惊人；虽然先生身体羸弱，但他从没有放弃自己的中国研究，笔耕不辍，著作等身；从先生身上，我领悟了日语中“一生懸命”的真正内涵。虽然他身患疾病，但仍会带我们去欣赏京都如虹似火的红叶，领略奈良的古朴风情；先生具有宽广的胸怀，先生说他与早稻田大学毛里和子先生的学术观点相异，但爱知大学召开学术会议时，他都会邀请她参会，进行学术探讨。

在爱知大学获得双学位的学生已达百余名，大部分在高校或科研机构从事着教育或研究工作，这必将对中日文化交流产生重大影响，也为中日共同和平发展培养了一股清流。先生虽然驾鹤西去，但他的指教如同一座指引航线的灯塔，为我们指明了前行的方向！



2008 年秋，加加美先生、张琢先生和臧志军先生与 2008 年五期生赴京都观赏红叶  
(前排右一为本文作者)

李汉卿 中国人民大学——爱知大学博士双学位课程五期生（2008 年入学）



## 悼念加加美老师

—人间曾美好—

李婉君

(浩瀚博能(北京)生物科技有限公司 总经理)

听闻加加美老师离世的消息，说实话并不惊诧，似乎在十几年前的那些晴朗的午后，谈笑风生的旅途中就隐隐做好了听到这个消息的准备，但真正听到了，心情还是沉了下去。

加加美老师给我上的课时并不多，讲述的内容也似乎和我的研究方向不那么衔接，有时候也会让大家讨论一些并不复杂的学术议题，似乎没有什么特殊之处，最多听到的传闻是这个瘦瘦弱弱的老师身体不太好，直到有一天翻看了加加美老师写的一篇有关中国文革的论文，至今还能记得当时震惊的状态，尽管对日本学者一向稳健扎实的学术素养有所了解，但还是被那厚厚一本详实资料与逻辑缜密的论文集吓到了，肃然起敬之情油然而生。

平成 22 年的夏天，加加美老师提议要带我们这届中国同学和几位日本同学一起去奈良旅行，对于当时老师的身体来说，这个旅行即艰难也没有必要。但一路上，老师总是带着发自内心的笑容，用轻松但充满热情的语气和大家聊天，也尽量创造机会让中日两国的同学多进行文化上的讨论。回想起旅途中的那些细节至今还是心存感念，也深深责怪当年的自己不懂事，甚至没有和老师说过一句像样地感念之语……

回国后，深陷在俗世纷杂中的我，偶尔想起加加美老师总有一股清流沁入心田。也不时会和朋友们提起，曾经有幸遇到过像加加美教授这样的日本老师，虽身染重疾，但怀着对



奈良旅途中

世间的希望与祝福，依然灿烂的活着，孜孜不倦的做着一生专注的学问，会带少有交集的学生去体验他们没有见过的世界。易境而处，我难以想象自己会像他那样面对生活，能善待身边的每一个人。也许接纳所有遭遇一定需要莫大的能量与胸怀吧。年纪渐长，越理解也越钦佩加加美老师的精神了。

斗转星移，青丝白发，人生终究逃不脱生老病死。但我有幸在人生旅途中曾经遇见加加美老师，他那种灿烂和力量，也能化成我生命中的力量，鼓励着我即便遭遇灰暗挫折，也可以从容笑对。

相信善良的加加美老师一定会在天堂安好，天堂也会因您而更美好。

李婉君 中国人民大学-爱知大学博士双学位课程六期生（2009 年入学）

## 加加美光行先生与现代中国学研究新范式的建构

刘 晖

(上海中华文化学院 教授)

恩师加加美光行先生永远离开了我们！15年前，我在爱知大学国际中国学研究中心（ICCS）攻读博士后期课程。先生以深厚的学术造诣、精到的学术见解、纯粹的学者品格，为我们传道授业解惑；先生以惊人的毅力坚持与病魔抗争，用弱小的身躯承载透析之痛、授业研究之重，把执



2007年11月，加加美先生带领2007级作者本人赴京都研修旅行

著和坚毅、乐观与通达传递给学生，致力于学术研究方法的重塑；先生在繁重的研究和工作的之余，还专门抽出时间带我们去京都研修旅行，带我们课后餐叙、品味特色日本料理、体验感受日本文化，为学生创造条件参与学术活动，致力于推动中日友好交流与合作。

尤为记忆深刻的是，加加美先生执著于现代中国学理论研究，志在构建现代中国学研究新范式。先生所著《现代中国学的新范式——共同态度性的提倡》，对二战以来中国研究的历史脉络进行了梳理，指出了从源自美国的地域研究到日本的中国研究再到现代中国学变迁的根本之处，在于需要扬弃西方中心主义思维方式。在社会科学研究日益发展的当下，东方主义无疑给中国研究带来了方法论层面上的偏失，也使得中国研究、中国的世界形象与中国的历史和现实无法同构。先生以数十年中国研究的学术积淀、问题意识和历史的想象力，提出了一个“重要的但具有争议性的命题”——现代中国学。

先生所著《现代中国学的新范式——共同态度性的提倡》，对二战以来中国研究的历史脉络进行了梳理，指出了从源自美国的地域研究到日本的中国研究再到现代中国学变迁的根本之处，在于需要扬弃西方中心主义思维方式。在社会科学研究日益发展的当下，东方主义无疑给中国研究带来了方法论层面上的偏失，也使得中国研究、中国的世界形象与中国的历史和现实无法同构。先生以数十年中国研究的学术积淀、问题意识和历史的想象力，提出了一个“重要的但具有争议性的命题”——现代中国学。

何谓现代中国学？现代中国学为何成立？现代中国学何以成立？加加美先生给我们带来一系列关于现代中国研究的新思考。

何谓现代中国学？

加加美先生在《现代中国学的新范式——共同态度性的提倡》中并没有给出明确的答案。我的理解是，先生眼里的现代中国学，是国外学术界从特定的视野和角度，对现代中国的政治、经济、历史、文化、外交、民族等领域进行综合性研究的一门学问。

首先，就研究的角度而言，现代中国学是域外的研究者用他者的眼光来观察中国现代社会，与中国本土的“现代中国学”不是一个概念，而在内涵上与“国外中国学”“域外中国学”接近；其次，从研究内容来看，现代中国社会的所有领域均是它的研究对象，是多元化的跨学科综合研究；其三，从研究的目的性来说，包括两个层面：一是学术研究，二是基于带有问题意识的学术

研究之上的实用性，这种实用性是多元主体对话与互动所产生的非强压式影响力；其四，从方法论的角度而言，先生首创了“共同行为论”，这是一种原创性的倡议，其完整的、系统的理论和方法论体系尚在探索之中。

现代中国学为何成立？

加加美先生为什么要执著地提出构建现代中国学及其方法论呢？首先，我认为先生是要与带有国策研究性质的地域研究划清界限，与之区别开来；其次，这亦表明先生的理论创新姿态，显示出欲彻底摆脱东方主义枷锁的理论勇气与超人性格；其三，“社会责任”的自觉意识促使先生致力于这一研究工程；其四，先生认为现代中国学应该有自己固定的研究方法，将其提炼成为一个方法论体系是可行的；其五，建构现代中国学专门的方法论，是科学的人文社会科学研究态度。社会科学提倡价值中立，提倡研究者要把自己的立场悬置起来，也就是说尽可能客观地、公正地来对待研究对象，这种科学的态度方能使人文社科研究尽可能地接近科学。在金观涛先生看来，不同的观察者、不同的人群、不同的民族有不同的立场价值，我们每一个人、每位研究者只要把这个价值拿出来，中立起来，让自己看到，并且相互看到，让外国的研究者和中国的研究者处于同等的地位，让他们像“镜子”一样引照出所谓的“共同性的态度”，认为这样就可以像“镜子”一样避免价值中心论[金观涛先生在2007年12月15-16日爱知大学国际中国学研究センター举办的“现代中国学の新しいパラダイム国际学术研讨会”上的发言]，这恐怕是加加美先生提倡现代中国学研究范式转换的目的所在。

现代中国学何以成立？

从地域研究到国别学，是社会科学研究发展的理性通途。现代中国学何以成立？先生提出必须具备三个前提：第一，必须承认，作为研究对象的各国的诸多主体，如国家、企业、个人、集团（地区居民、NGO、学术团体）等，具有依据自身的目的性价值判断来从事本国变革的主体性，而且这种主体性与作为外国人的“国别学”研究者的主体性处于同等位置。而针对各主体构成的这种状况，作为外国人研究者亦具有自己的目的性态度（价值判断与行为）；第二，研究对象各主体与研究者自身这一主体之间，各自的目的性态度相互联动和影响，任何一个主体的态度都难以单方面操纵其他诸多主体的态度。这里将各个主体之间的相互联动性称之为“共同主观性”或者“共同主观的存在结构”（inter-subjectivity on being）。外国研究者这一主体亦受控于这种相互联动性；第三，上述诸多主体的目的性态度（行为）之间的相互联动性不仅表现为相互协调、相互结合，也可能相互对立。在这种相互联动的“共同主观性”中，东方主义的弊端就会因为西方中心主义的价值判断这样一面互相映照的镜子的存在，而显现出其本相。外国研究者进入这种由辐辏而形成的“共同主观性”的相互联动性之中，需要探明东方主义的认识结构和存在结构，从中发现研究课题和解决方法[加加美光行：《现代中国学的新范式——共同态度性的提倡》]。

在加加美先生看来，只有形成以上述三点为核心的方法论框架，“国别学”或者说“国别研究”（nation-studies）才能成立，并把这一方法论称为“共同行为论”或者说是“共同态度性”（co-behaviorism）。对先生提出的这个概念，也许只能意会，难以准确言传，而且这种领会存在一个由模糊到逐渐清晰的过程。co-behaviorism在中文和日文中均没有完全对应的词，无论怎样翻译都很难与先生的本意相吻合。但可以肯定的是，这个方法论的意涵与“共意行为主义”并非是一回事。

仅以此短文，悼念恩师加加美光行先生！先生天堂安详如常！

刘晖 南开大学-爱知大学博士双学位课程四期生（2007年入学） 2022年7月21日

## 世间再无加加美

刘正强

(上海社会科学院社会学研究所 副研究员)

惊悉加加美先生辞世，心中无比怅然。加加美先生虽然身体不好，却有顽强的毅力，视每三天进行一次的血液透析如家常便饭；在与病魔做斗争的同时，又笔耕不辍、著述等身。他为人低调、谦和、乐观又单纯、朴素、纯粹，令我们没齿难忘。多年来，鉴于先生的身体状况，在心头对先生总有一丝隐隐约约的担忧，担忧先生会不会不久于人世，但又为这种想法感到愧疚和自责，感觉这是对先生的亵渎。是的，我确信加加美先生身体会一直无恙，中国民间也有传说，认为经常病怏怏的人反而更会长寿。这是因为这样的人久病成医、御病延年，更懂得保护和调理身体，对于生命的看法也更达观、淡然，即俗语所言的“弯扁担不易断”。这种民间观念虽然没有科学依据，但也有一定的道理。而加加美先生正是在其“病怏

怏”的状态下展现出惊人的生命力和创造力的。所以，我在内心深处一直期望他能长命百岁。

然而，先生终究因病魔离我们远去。当我听到这个消息时，先生驾鹤西去已有时日……我为自己没有能在第一时间获悉先生离去的悲信而深感难以言述之悲哀。我想，以加加美先生生前之境界和为人的低调，他是想安静地离去的。加加美先生辞世的突然，无疑对我们一厢情愿的心理祈盼是一个冲击：我属于不善客套、不善社交和不注重繁琐礼仪之辈，所以多



加加美率中日双学位生于 2007 年游京都（左一为作者）

年来不曾与加加美先生有邮件往来，本意是尽量不打扰身患疾病和工作繁忙的先生，但现在只能责怪自己的怠慢和拖延。其实自己一直相信加加美先生会像我希望的那样，会像一支不会燃尽的蜡烛那样，永远散发出他独特的具有亲和力的热量，也在冥冥中一直希望有机会再去日本拜访先生，也期盼疫情结束后，我们又会在某场学术会议上见到先生。只是，天妒英才，命运选择让加加美先生离他的学子远去，而他选择安详静谧地离开，一如生如夏花之绚烂，死如秋叶之静美。

没有人是一个孤岛，无论谁的离去都是我们的一部分的离去。无需赘言加加美先生于我们而言更是如此。无论这世界多么光亮，我都会怀念先生这道不息的烛光。



2007年现代中国学论坛上与加加美先生等合影  
(左一为江沛，左二为金观涛，右一为本文作者)

刘正强 中国人民大学-爱知大学博士双学位课程四期生 (2007年入学)

## 回忆我的导师加加美光行教授

盛林

(南开大学马克思主义学院 教授)

5月4日中午,在李春利老师的 Seminar 群里,惊闻加加美先生去世的噩耗。去年秋天,承担爱知大学《中国社会特殊研究》课程期间,李老师曾经提过,先生身体状况欠佳,但后来很快便好转了。突闻先生仙逝,心里一时难以接受。16年前,先生总是面带微笑的慈祥面孔,娓娓道来的授课,亲切耐心的指导,一幕幕浮现眼前,似在昨日,心情更觉悲痛。

2006年的春天,经过笔试、面试的遴选,我被录取为南开大学-爱知大学联合培养的博士研究生,成为加加美先生的一名学生。至今,依然记得当时内心的那种激动。我第一时间向国内导师汇报了这一好消息。我的国内导师朱光磊教授非常支持我参加这个联合培养项目,并强烈推荐我选择加加美先生为导师,他说先生是日本研究中国政治问题的领军人物,从他那里可以收获众多日本有关中国研究的新视野。

我被爱知大学正式录取时,正在参加赴韩国延世大学的访学项目,没能参加当时的远程开学典礼,错过了与先生的线上见面。我用当时的 YAHOO 邮箱给先生写了一封 Email,向他解释了原因,并汇报了自己关于中国“两会”问题研究的基本设想。很快,收到了导师的回信,肯定和鼓励了我的研究计划,并建议我加入比较研究的内容。这是先生回复我的第一封信。由于 YAHOO 停用的原因,当时未及时做邮件的备份,之后我无法找回这封邮件,一直遗憾至今。

2006年9月,在美丽的爱知大学黑笹校园里,在先生的办公室里,第一次与先生见面。先生比线上面试时更显和蔼可亲。加加美先生在日中两国,都声名远播。他是日本现代中国学研究的先驱者,也是爱知大学国际中国学研究中心(ICCS)的创设者,因他的创设理念和辛勤耕耘下,中心被日本文部科学省认定为“21世纪 COE 工程”。但在我们学生面前的他,却总是那么平易近人。他非常关心我们这批学生到日本后的生活安顿情况,从研究室、语言学习、日常生活等各个方面,给予了我们最悉心的关怀。

深秋,先生带着我们这届学生去了日本最美、最有历史感的两个城市:京都和奈良。先生是 ICCS 的负责人,平时的行政事务、科研工作、教学工作任务很繁重,而且,在那个时候,他每周都需要去医院做两次透析。每次上课时,看见先生手臂上鼓起的人造血管,我们都会既感动又心疼。即使这样,但他还说,他一定会陪每一届学生到这两个城市去看看。京都、奈良的旅程中,近距离地和我们分享着日本的历史、文化以及他的人生先生之举,至今,历历在目。



本文执笔者与加加美先生摄于京都（2006年11月26日）

先生一生致力于促进中日两国的相互理解和友好交流。先生的学术研究是有情怀的，是一种真正的“大爱”。课堂上，先生通过国家层面、民间层面中日外交的阐释，让我们明晰了对中日关系历史、现状和未来的理解。在中日关系的一些关键问题上，先生是旗帜鲜明、态度坚定的。听说，以前在东京时，为坚持中日关系友好发展的立场，瘦弱的他在收到夹有空弹壳的会议邀请函后，仍会大义凛然地孤身前往，与众多观点对立者唇枪舌剑。他说，他不害怕，因为他相信自己是对的。

转眼，疫情下的生活已近三年。期间，自己在南开的学生也加入了爱知大学的联合培养博士项目。本来，去年秋季学期，计划在爱知大学授课时，去看望导师，但因为疫情防控原因，改为线上授课。日本之行未能实现，因此与先生未能相见，也成为毕生之憾。

愿在天先生祥和如常！学生想念您，难忘和您在一起的学习时光，难忘攻读博士期间您的悉心指导，难忘赤池居酒屋您多次的款待，难忘您总是挂在脸上的微笑……

先生是我的学术引路人，学生一定会加倍努力，不辜负先生教诲！期待早日赴日本祭拜恩师！

盛林 南开大学-爱知大学博士双学位课程三期生（2006年入学）  
电子邮箱：sln309@126.com

## 大悲心与现代中国学

—怀念加加美先生—

涂明君

(天津行政学院 教授)

京郊的五月，杨絮漫天，东瀛传来噩耗：加加美光行先生4月22日去世。悲痛间，思绪纷至。

先生是我日本的博导，先生惯以微笑面对一切，不喜哭哭啼啼的告别，更不愿动扰他人，樱花凋落，先生安静地走了，他会是带着慈祥的笑容告别这个世界的。以先生那样以微笑面对苦难和遗憾，面对生和死，可能才是对先生最好的告别与纪念吧。

先生二十六岁起就患肾病，常年透析已经带来许多并发症。2010年初，我和内人去名古屋见先生，他身体还不错，席间相谈甚欢，但几个月后突发脑溢血，多亏岛国医术不凡，先生还能重返讲坛。2015年12月初，先生已退休半年，之前并发了腹痛，我们带着孩子去东京埼玉看望他。躺在瑞穗台病院的先生身体很虚弱，看到我们，他露出孩子般的微笑，赤诚、慈爱，也很柔弱。九年前的12月，先生特意带着我们到京都游学。先生带我们在这座古城里，参观宿禅院，观黑石白沙，听晨鼓播魂，怜黄栌迷幻。岚山层林浸染，一树树的红叶如火一般燃烧，桂川江缓缓流淌，托载着两岸绚烂的生命。令人难忘的，还有渡月桥边的面馆里品尝的醇香的骨汤拉面。先生带我们领略的美景，美食，美，是京都独特的历史和文化遗产，也是中日友好的善根。但是，在2015年，病榻中的先生已无法带我们远游了。

2017年夏天，我带着拙著去东京向先生汇报。书未必是佳作，但让先生过目是必须的。先生



2017年7月 国立一桥大学边饭馆  
与老师最后一面

和师母带我到一桥大学附近的一家饭馆。他出生在这一带，年轻时就经常光顾这家店，它的菜样、味道、甚至摆设几十年都没变化，使我体验了怀旧的风情。先生当天身体和精神出乎意料地好，轻酌慢品间，他谈到不久前在一桥大学做讲座时，分析了中国现状，预测十九大及以后的走向，准备在筑波书店出一本相关内容的书。恍惚间，我仿佛回到了几年前在爱知大学时的时光。那些年，先生住在名古屋和丰田之间的赤池，常带一两个后生到公园附近的牛排馆，抿一口红酒，解几番红尘。

在这次和先生的午餐时，谈到了我书中的内容。他说他在读东京大学时，就经常在课堂上质疑自己的老师富永健一的社会系统论。我没想到日本社会系统论的鼻祖竟然是先生的老师。先生对其师的社会系统论的态度似乎几十年不变。然而，先生很称赞金观涛的系统哲学的研究，看了我的书才知道，中国还有与金不一样的钱学森系统论。对我的钱在今天对中国治理的影响更直接、更大，成绩挺大，带来的问题也不小的认识，老师很感兴趣，鼓励我进行进一步的研究，将结果公诸于世。尽兴与谈的先生，思想活跃、娓娓道来，偶尔在不知用什么词汇表达的时候，就孩子般不好意思地对我笑笑：“中风后遗症，有些词在脑子里转，可嘴上说不出来”。我顺着先生的语意蹦出一个词，他就微笑着说：“对，就是这个”。我们好像又共同进入了一个境界，很是开心。



当日午餐后，我们一同去各奔东西的地铁站。进入站台时，年迈的师母搀扶着弱小的拄着拐杖的先生，每走一步都不轻松。之后先生赤子般地微笑着，向我挥手道别，蹒跚着上了车。我的眼眶有些湿热，眨眼望向远处，蓝天上白云悠悠，正午阳光照耀着的大地，干净，宁静，透亮。回归故乡的先生，心里挂念着的依然是中国。

先生曾经无数次走访中国，留下踪迹之处比我们中国学生都多。我作陪和受教益最多的是湖南之行。2007年，先生将获得的中日文化奖奖金200万日元捐献给衡阳，用于建设偏远的东升小学校舍，名古屋日中友好协会又添了100万日元。2008年中秋前夕，先生带着友协的干事长和爱知大学的几个学生到小学交流。在县官员和全校师生欢迎会上，老师再次讲述了一件旧事：他的二哥死在衡阳，改革开放初，排行第九的他带着族人去祭奠，他的姐姐恸哭不已。当地一个不相识的太婆不忍，抱住她轻拍安抚，共泣热泪，化解孽障和苦难。老师深为感动。这件事，先生多次向友人和学生们提起。讲完此旧事后，先生问我：“我这次讲得是不是不太好？”我问他为啥这样想，老师说：“我讲话时观察大家的表情，好像在努力地想听懂我的话，但一直还是很迷惘的样子。”先生对自我的审视，映射了他作为学者的严谨风范。

那次我们回到长沙，都比较疲惫，但先生还是主动关心我博士论文的进展。论文主题是程序化与中国现代化，我说只想研究透现代程序的源起和形成期，即19世纪末到1920年代这一段。先生说，一定要写中国程序观念的整个发展脉络，把内在逻辑梳理完整，一直写到当代。为此，他还特意提到与中国学者的一些交往：1980年代和韩树英的交流；1990年代在某学术会议中与李泽厚的沟通，为李和东京大学等日本学界的穿针引线；在参加香港中文大学观念史会议时，听到金观涛说他不像日本人，是国际人时的愉悦；会议期间许纪霖赠给他《启蒙的自我瓦解》等。

之后几天的旅途中，先生和我又探讨了与程序观念相关的现代化、科学与民主、共同行动论、实践标准与观念形态、日本《公害法》形成过程、公民和个人、个人（自我）的三个层次、新民与人民和公众、民族和国家、天下观、革命的排他性等问题。在长沙、北京时先生一周需做的三次透析，我帮着联系和陪伴过几次，一次透析大概要大半天的时间，久卧又令他倦怠，但一谈起中国，先生就精神矍铄，完全不像病榻之人。这种鲜明的反差，折射了先生对对谈者的人文关怀，和对中国现代化和现代中国学赤诚的热情。

先生的慈悲，是超越了民族和国家藩篱的大爱，对中国人，日本人，非洲人，欧美人，全世界的人；好人、犯错认错的人，愚钝的人，聪明的人，聪明过头的人，支持自己的人，反对自己的人，所有人，他都具有博大、深沉、持久的爱。这可能是他一项项独特的人文创举的根基：力避传统汉学和费正清中国观察学之弊，开创共同体的现代中国学；力主举资兴建南开大学的南开爱大会馆，会馆每年可接受近两百名本科生在南开接受一个学期的现地汉语教学，集中优质资源，成功申请到日本文部省重大学科建设基地，即国际中国学研究中心，举办多次选题独到、影响中国学发展方向的国际学术交流活动；创办爱知大学、中国人民大学、南开大学三校联合培养双学位博士和硕士项目，入学此项目的学生已达一百多人。这些为拓展现代中国学的视野而不可磨灭的贡献，都是静寂离去的先生之创举。

作为学生，虽然达不到先生那样慈悲大爱的境界，也达不到先生那样的事业高度，但学会了如何拥有一颗关爱他人的人文之心；也领悟了如何继承先生般的无畏的进取精神，而去勉力推进现代中国学、勉力推进中日友好；虽然不具先生那样真诚、暖阳般温润、慈祥的笑容，但会努力微笑着渡过学人之人生。先生与他的微笑伴随着我，他并没有离去！

涂明君 2022年5月 恒大御景湾 北京

## 关于加加美先生的几个印象

—一个双学位项目受益者的粗浅感受—

王丁

(南昌大学国学研究院 讲师)

我是南开大学与爱知大学 ICCS 双博士学位项目 2013 级的学生，也是这一项目的第十期生，受益于加加美先生推动的这个项目，我得以留学爱大一年，向诸位爱大的老师学习和了解日本的中国学研究，并于 2021 年获得爱大中国研究的博士学位。留学爱大期间，恰逢加加美和马场两位先生的退休之年度，因此我们也应该是聆听两位先生在爱大授课的最后一届学生。在此期间，我虽然仅选修了加加美先生的一门课，与他接触的机会和时间并不多，但加加美先生却给我留下了非常深刻的印象。

早在留学爱大之前，我就知道加加美先生了。在南开大学八里台校区内，有一栋爱大资助兴建的南开爱大会馆，每一年的上半学期会有来自爱知大学现代中国学部二年级近 200 名的学生，来南开大学接受国内的现地汉语教育。而南开爱大会馆的兴建，和爱大现代中国学部的建立，都离不开加加美先生竭尽全力的倡导和身体力行的努力。2002 年，加加美先生又创立了国际中国学研究中心（ICCS），几年后又开创了南开大学与爱大的双博士培养项目，无需赘言，这些无一不是加加美先生推动的中国研究的成果，因此可以说爱大享誉日本和世界的中国学研究，与加加美先生的推动不可分割。如此热衷于中国学研究，并积极推动中日友好交流的加加美先生，自然引起我们的敬佩，所以，在留日之前，我就暗下决心，留学日本后一定选修加加美先生的课程。



2014 年 3 月 6 日在爱大名古屋校区“加加美光行·马场毅两教授退休纪念 最终讲演”欢送聚餐会上与加加美老师的合照。

2013 年 9 月，我来到爱大，因第一个学期没有加加美先生的课程，初次见到先生是在爱大研究生院中国研究科为我们这一届双博士学位项目的留学生举办的欢迎餐会上。当时加加美先生正在赶一个稿子，但还是在百忙之中参加了餐会，并在会上与我们亲切交流，他笑容可亲，让人没有任何距离感。2014 年 3 月 6 日，我们参加了加加美和马场两位先生的退休纪念讲演会，聆听了两位先生的学术历程，知晓了他们对日本中国研究的贡献，对中日友好交流的推动，让人愈加感动和敬佩。

2014 年 4 月，我参加了加加美先生的“中国政法特殊研究”的课程。加加美先生备课十分严谨，在课前他会提前将讨论的材料和主题发给我们，让我们思考和写出各自的感想，以便在课堂上让我们能够进行充分讨论。特别是围绕着加加美先生建构的现代中国学的新范式，在课堂上讨论得最为热烈，大家也从中获得了很多新的视角、方法和感悟，也让我们对日本特别是爱大的中国学研究有了进一步的认识。

身体羸弱的加加美先生，2014年6月16日又从椅子上摔下来，腿受伤而不能走路，因此缺了几次课。为此，加加美先生不仅特意发邮件对我们表达歉意，还在腿伤稍好一些后，就立刻发邮件告诉我们第二天的课他一定会上。第二天上课时，让我们甚为惊讶的是，先生竟然是坐着轮椅来给我们上课的，还在课堂上若无其事地与我们讨论问题，这让我们每个人都非常感动，也领悟到了加加美先生教书育人的品格。最后一堂课，先生仍然坐轮椅来上课，在课程结束后，还和我们一起聚餐畅谈，临走前还和我们每个人拥抱告别。

加加美先生退休后，将他的诸多藏书捐赠给爱大图书馆，并告知爱大的师生只要登记后均可无偿领取，且没有册数限制。其中有不少是珍贵的稀有的藏书，我和同学也特意去挑选了一些，而今睹书思人，不禁悲从中来。

我结束在爱大留学一年的学业，返回中国后，就再没机会见到过加加美先生。但在2015年7月15日收到他发来的邮件。先生在邮件中，平易近人的告知我他正式离开爱大，并回到了原本在琦玉县所泽市的自家。邮件中先生还回顾了他创办爱大现代中国学部、国际中国学研究中心（ICCS）以及启动爱大与南开大学、中国人民大学的双学位项目的经过，使我更进一步领悟到加加美先生在推动爱大中国研究和中日学术交流中的重要贡献。

加加美先生虽然已经离开了我们，但是他创建的现代中国学研究体系，和他培育中日两国中国研究的人才，必将会成为推动中国学研究的宝贵遗产，也必将会继续推动中日友好交流的发展。在这个意义上可以说，先生并未离去，而我们将用缅怀先生之情，完成他的未尽之业！

王丁 南开大学-爱知大学博士双学位课程十期生(2013年入学)  
2022年7月26日

## 经师易遇，人师难遭

—追忆和加加美老师在一起的日子—

王芳

（爱知大学孔子学院中方院长、南开大学金融学院副教授）

7月16日，我参加了由加加美老师生前的同事、好友、学生自发组织的加加美光行先生追思会，通过回放的视频，我第一次见到了先生年轻时俊朗的模样。克制了好久的情绪突然瞬间瓦解，我不知道是泪眼模糊，还是记忆恍惚，一下子就把我拉回到十八年前和加加美老师相遇相识的日子。

和加加美老师相识的时候，先生刚好60岁，虽然那时的先生已经失去了年轻时俊朗的模样，但依然精神矍铄。因为加加美老师见到我们总是和蔼可亲、笑容可掬，所以总让我想起“慈祥”这个词。

加加美老师把我领入了一个全新的中国研究方法论的世界，由于我的专业是经济，虽然偏宏观经济，但当时对于先生思想的把握和领悟还是止于“门外汉”的程度。不过先生让我坚信了一个事实，那就是：研究方法是至关重要的，综合的学科及知识结构对找到所研究问题的深层背景和预测发展趋势是非常有帮助的。换一句话说就是，先生教会了我思考。

加加美老师还是“现地中国研究”的创始人和积极推动者。他倡导研究中国的日本学生一定要到中国亲眼看看了解真实的中国。反过来，他也鼓励我们中国学生来日本后多去日本各地看看，从而了解真实的日本。为此，他还曾两度从繁忙的工作中抽出时间，并自掏腰包亲自带领我们去京都和奈良考察学习。在京都和奈良时，先生不忘把课堂搬到我们住的寺庙，花很长时间准备并给我们讲授日本古代史和寺庙文化。



2005年与加加美老师在奈良飞鸟合影

如今18年过去了，已经记不清走过了几十还是上百座日本的寺庙。记得在一次旅行中，黑云密布，我在直接去车站还是先去计划中要去的一座山上的寺庙之间犹豫不决时，我突然想起了当年和加加美老师一起在寺庙时的情景，不知不觉就已经走在了上山的台阶上。这时大雨倾盆，浑身湿透的我跟跄地在石阶上攀爬，虽然山顶的寺庙没有我想象的那般宏伟壮观，但是因为回想起了加加美老师，我觉得心里很温暖，而且是他带给了我克服困难的意志，让我最终坚持在艰苦的自然条件下爬到了山顶。

和加加美老师每一次交流都受益匪浅，哪怕在闲聊中也总会发现值得深入思考的内容。比如，在我博士毕业论文的后记中，有一段文字就是来自加加美老师。老师当时说，很多日本人觉得中国人不讲秩序，但是他们忘了日本战后工业起步时同样的情形。先生接着说，当时在东京车站，列车开过，站台上会留下了一堆鞋子……。先生甚至还聊过他的夫人邦子老师年轻时在工作中的“趣事”，据说上个世纪60年代日本很多公司对女员工实行差别待遇，男员工每天8点上班，但女员工要6点上班打扫整个办公室的卫生，但工资还比男员工低。所以加加美老师就鼓励邦子老师去工会投诉争取公道。估计那个时候这种现象特别普遍，所以工会研究下来

也是没有什么对策的。但是可以看出加加美老师是日本女权觉醒的先驱，他的观念总是能保持超越当时普遍观念的高度，决定了他日后在中国研究方面不朽的成绩。结合他对南京大屠杀的历史性反思，加加美老师是正义的典范这一事实已经根植在我们心中。

一年的留学时光稍纵即逝，离开日本后和先生的交流甚至聊天的机会少之又少。唯一能经常看到的就是先生每天四五点钟在 msn 上准时上线，估计又开始一天的工作了。有的时候我很想提醒先生注意身体，但是确实又难以判定对工作忘我的爱是支撑他生存的动力还是毁掉他健康的元凶。所以，我选择默默关注、默默祈祷、默默支持。每次有爱大的老师来，我都要打听一下加加美老师的近况，双学位的学弟学妹们从日本回来，我也会问起他们和加加美老师相处时的情况。

时间转眼就到了 2016 年，我有机会又回到爱大担任南开大学和爱知大学合作的孔子学院中方院长。但此时加加美老师已经在两年前退休，回东京居住了。不过我想也许上苍听到了我翘首企盼的心声，不到半年，我竟然就见到了加加美老师，而且是在爱大。不能不说这次重逢是有一些伤感的，因为先生那时表达已经有些困难了，但是他见到我时露出的惊喜和慈祥的笑一直让我揪心忘不掉。我努力想和先生汇报一些别后的情况，先生则用更多的笑望来回应我。之后，点点滴滴还能从各方听到一点关于先生的信息，总觉得他会是永远不熄的蜡烛，摇曳但是惊人的顽强。虽然知道他多次与死神擦身而过，但是总觉得面对坚强的灵魂，死神是会望而却步的。



2017 年与加加美老师在爱大附近重逢

思绪又把我拉回到 7 月 16 日追思会的现场。我知道先生是真的离去了。在现场我听到一个又一个关于先生的感人故事，虽然很遗憾未能在先生生前得知，从而在心灵的天平上再增加一些崇敬的砝码。但是看到先生的光芒闪耀在线上线下每个人的心中，大家在缅怀、在歌颂这个无论从思维方式、意志力还是为人方面都不同寻常的人，我很庆幸自己能与这个“经师”与“人师”的结合体在年少时相识，亲聆指导，身受影响。

回到与追思会现场只有一墙之隔的教研室，我翻开了自己基于南开大学和爱知大学毕业论文的研究成果而写就的专著。在全书的最后一部分，我深深凝视加加美老师的名字，嘴里轻读：“感谢加加美光行教授，是他在每个星期做两次透析的情况下仍坚持推进国际中国学的研究事业，并为我们创造去日本学习的机会。先生从教三十余年，始终爱生如子，让我们不断感受到父爱和师爱的双重温暖。先生四十年坎坷崎岖的中国研究经历始终充满丝路花语。耕耘中常有青

鸟殷勤探看，耕耘后更有落英缤纷的心路历程。先生苦心研究的中国研究方法论，为我们从事中国研究开启了一扇希望之门，让我们能超脱国境领悟到中国学的博大精深。”

在我心中，加加美光行老师既是离去，也是归来。他的终点就是我们的起点，他未竟的事业就是我们新的研究课题。我们会把从先生身上汲取的营养转化释放，做好经师人师，做个合格的中国研究耕耘者。

王芳 南开大学-爱知大学博士双学位课程一期生（2004 年入学）

## 中日互鉴与“共同态度性”的时代回响

—追忆恩师加加美先生—

席伟健

(哈尔滨工业大学(深圳)马克思主义学院 副教授)

2022年春天,新一轮新冠肺炎疫情席卷世界。由于年初深圳疫情的紧张,我所在的哈尔滨工业大学深圳校区从2月底到4月初,经历了一次长达40天的校园闭锁。到4月下旬,校园重新有限度地开放,学生纷纷返校。不料正在彼时,网端传来了恩师加加美光行教授辞世的噩耗,闻讯后一时间百感交集,恩师生前的音容笑貌,不禁涌上心头。虽然我上次赴日时间是2019年8月携家眷旅游,但是见到加加美老师则是2011年底赴爱知大学参加学术会议的事情了。当时怎么也没想到,彼时一别竟为永诀!

现在遥忆加师对我们的点拨与启发,一开始是在人民大学的远程课堂上。作为中国人,对身边每天发生的一切早已不敏感也不关心。但是正是通过跟随加加美老师的学习,我们才开始认识到,原来“现代中国学”是一门重要的学问——在社会学上叫做对熟悉的事物进行“陌生化操作”,以保持知识社会学上的省察距离,并尝试学习如竹内好、丸山真男、伊藤虎丸等日本思想家那样返观自身,对自己国家的文化和文明开始“回心”、“转心”式的拷问与思索。正如他的一本专著书名所示,中国和日本可以在对自身现代性思考时互为镜鉴。

加加美老师时常回忆,自己有一个“东大毕业”的母亲,是一个受过现代高等教育的女子。但是,受时代洪流裹挟,最终成为11个孩子的母亲,并且有两个孩子战死在侵略战争的战场上。加加美老师每每念及此处,情绪就不禁激动起来。这样的生命经历,也奠定了他学术求知的生命底色,即对欧美现代性进行彻底的拷问与批判。这一被总结为“共同态度性的”学术主旨,与中国人坚持的中国化的马克思主义立场、观点与方法,在学术旨趣上也是内在一致的。

后来才知道,加加美老师的导师是东大著名经济社会学家富永健一先生,但是因为20世纪60年代日本高校“全共斗”运动的兴起,导致师生二人关系失和。作为学生,我们能够理解加加美老师,对他的学术坦诚业有了更多的认识与敬仰。在学脉传承上,富永健一先生私从帕森斯教授,而帕森斯教授又被学界视为韦伯的高足。所以当时的感觉很奇妙,就是作为“学术小白”的我们,竟然通过加加美老师,与古典社会学的学术传统产生了如此奇妙的联络,同时也催生了我们的学术荣誉感和责任感。

加加美老师也是一个非常有生命恢弘感的人,记得他曾经说,1979年甫一踏上中国大地的时候,给他的感觉是“贫穷而亲切”。作为中国学生,一开始我们听了感觉不舒服。可是,随着年龄的增长和学术阅历的增加,才开始真正明白他的意思,其实是一种生活在后工业社会的人,对前工业社会所持的“乡愁”情感。而如何处理好工业化社会条件下的城乡关系,守望人类的乡土文明,正是21世纪马克思主义思想的内核!加加美老师也是一个热爱日本文化、日本人民的学者。曾经蹭过他打的出租车——大家都知道,对于留学生来说,在日本打车是一件多么奢侈的事情——在车上,他跟出租车司机热情攀谈,嘘寒问暖,让我这个学生也倍感暖意。无论如何,身教胜于言传,这种教育对于学生来说是润物细无声的。

纸短情长，本文短短的篇幅记载不下我对恩师的思念，唯有勇敢地继承加美老师的遗志，立德树人，做好教师的本职工作，将先生开创的现代中国学的教育研究事业薪火相传地传递下去，才是对他毕生努力最好的回报。

先生千古！

席伟健（中国人民大学-爱知大学博士双学位课程四期生、2007年入学）

## 求真务实，平易近人

—追思加加美老师—

肖龙

(福建商学院传媒与会展学院副院长 副教授)

对加加美老师的初步认识，是通过 ICCS 的李春利老师和其他老师的介绍形成的，即爱知大学现代中国学部的创始人、双重学籍博士交流项目的奠基者、求真的学者等的认识。2015 年 9 月到达名古屋后，李春利老师说会邀请已退休的加加美老师为我们这批同学授一次课，对此甚是期待，在加加美老师因身体状况延推了一两次后，我们终于迎来了和他的初次相见。

初次见面，加加美老师面带微笑，和蔼可亲。课上老师介绍了自己的经历，讲述了中日关系的过去、现在与未来的他自身的想法，并和我们交流讨论了中日关系的问题。在中日关系的讲述与讨论中，我感到老师务实求真，能坚持自己的看法和观点。老师也表达了自己对中国的深切热爱的两个原因：一是从小体弱多病，受益于中医；二是 70 年代开始多次前往湖南衡阳悼念其战死于此地的大哥时，曾受到当地人民的友好接待。老师得知我是湖南人，提到其衡阳滞留期间所住旅馆人员在当时条件差的情况下，还为其挑水洗澡等友好之举等经历，提及这些，他总是眼睛一亮，仿佛几十年前的事就发生在眼下。事后，加加美老师和同学问我为什么衡阳人民(几十年前发生了惨烈衡阳会战的情况下)会对他一个日本人士这么友好，我回答“原因可能是湖南人民大多爱憎分明、率直、拎得清，不计前嫌，另外就是湖南五里

不同音、十里不同调，我祖父那辈人基本不会说普通话，也分不清普通话和其他语言，估计可能不知道加加美老师是日本人士吧。”

在车道校区教学楼的课后，我同加加美老师一起坐电梯下楼，在电梯上，老师看着我说“肖龙同学，你和我身高差不多，一样瘦小，也是因为没好好吃饭吧”。我笑笑回答“是呀，小时候家里条件不是很好，营养摄取不够导致的”。说后跟老师会心地相视一笑，就此相别了。

此后，很遗憾就没再见到加加美老师了，但在校友群里偶尔会听到老师的消息和看到老师照片，多是健康每况愈下的消息。但从老师



15 级人大-南开-爱大 8 名双学位博士生（左二为作者）爱大博士生有田（左一）同加加美老师合影

发自内心的笑容，以及他在课上谈到自己从生病到治病（加加美老师提到中医给了他继续活下来的机会）的语气和研究中国的生涯来看，老师的一生是开心的、有意义的，病痛并没让他自怨自艾，而是激励他找到了自己的人生所处的位置和行进的方向，并为实现自己的理想坚守了自己的方向，给人世间留下了自己的痕迹，这是值得敬佩的。也就是他的这种精神，



让我们这些学生每每提及加加美老师，谈到的不是他的病痛，而是他的笑容；也不再为他的病痛感到可惜，而是为他独特的一生而感到的敬佩。

肖龙 中国人民大学-爱知大学博士双学位课程十二期生（2015年入学）

## 致吾师加加美先生哀悼文

熊贵彬

(中国政法大学 副教授)

五月初，在北京新一轮疫情防控中，惊悉在日本留学期间的指导教授加加美光行先生已于4月22日仙逝。这则消息不禁将我拉入十六年前留学日本的点滴情境中。

2004年我进入南开大学攻读社会学博士，秋冬季接到南开同日本爱知大学中国研究中心 ICCS 联合培养双学位博士项目的报名通知，导师鼓励我报考。在经过笔试和面试之后，感觉并不好的我竟然有幸入选此项目。2005年上半年开始通过远程视频教学，我选修了爱大的部分博士课程，在此期间面临选择留学爱知大学后的导师的问题。在爱大大学院中国研究科\*不是现代中国学部和 ICCS 有几位华裔教授，但是我想，既然是留学日本还是选一名日本教授吧。当时对今井教授的研究领域比较感兴趣，于是就选他为导师。当年9月我们赴名古屋后，发现今井教授难以进行中文口语交流，课程也是日语授课。而我是通过英语考试入选双学位博士项目的，不能用日语进行交流，感到很为难。之后，在 ICCS 中心的建议下，我重新选择了导师。也就是毫不犹豫选择了中文水平最高的加加美先生。当时，虽然他已接受了和我同期的三位同学，但还是很愉快地接受了我。

加加美先生是日本著名的理性现实派。先生曾同我们谈到，他的二哥和三哥分别于1944年和1945年战死于湖南衡阳和东南亚，这个结局促使他日后对日中战争进行了深刻的反省和批判。他不仅在其论著中，在各种会议中，也都同日本持保守观点的学者进行了系列针锋相对的论战。据说，在一次会议中，先生被持不同意见学者围攻，论战整整持续了一天。不仅如此，甚至有右翼分子投掷石块将他家窗户砸破。但他依然坚持批判和反对右翼否认南京大屠杀的事实；反对日本国内的“一亿玉碎”和“一亿忏悔”观点，认为这导致了“全民无罪”

思想，进而提出“区分论”，即由主要军国主义分子承担发动侵略战争的责任。他这些思想和行为，在中日关系困局背景下，实属难能可贵，使我们肃然起敬。

先生是爱大现代中国学部和 ICCS 的创始人，也是联合培养双学籍博士项目的倡导人和发起人，也因此对第二期生的我们，倾注了大量心血和关照。先生因肾疾患需要长期透析治疗，然而他依然会在百忙之中，带领我们前往京都金阁寺和清水寺，奈良的东大寺，丰田市的汽车城和日钢厂等地参观。同时，也经常嘱咐办公室工作人员尽量协助我



2006年初夏，摄于奈良古坟外

们解决学习和生活上遇到的问题。在爱知大学博士论文撰写过程中，先生在写作框架和论证思路方面进行的把关，使我避免了很多弯路，能够在第二期项目中，第一批通过了论文答辩。

吾师加加美先生，总是如沐春风、慈祥如故、亲切笑容。先生驾鹤仙去，是构建中日关系正常化的一大损失，是吾辈留日眷恋和记忆链的一个断裂。隔海追忆，呜呼哀哉，悲兮痛兮！

熊贵彬，南开-爱大双学籍博士二期生

2022年7月21日

## 先生之风，山高水长；先生之功，利在千秋

—怀念先师加加美光行先生—

熊李力

(对外经济贸易大学国际关系学院 教授)

2022年5月4日上午，立夏前夕的北京，正值“五一”小长假，春和景明、郁郁青青。我正在驾车前往郊外的路上，突闻噩耗：加加美光行先生已于4月22日与世长辞！顿感天旋地转、天昏地暗、白日无光，几乎无法继续前行。我于2007年7月博士毕业，此后入职对外经济贸易大学，至今已整整十五载。这十五年间，与先生有过通话也发过邮件，其间也曾两度回访爱大校园，但未曾再见到先生。想到这里，无比心痛。倘若在日时能前往琦玉探望先生，哪怕是短暂相聚也好，通几次电话，哪怕是寥寥数语也好，多发几封邮件，哪怕是短短几行也好，这些机会再也无从寻觅。时至今日，先生已去，情何以堪！

难忘先生的博学儒雅！我于2005年4月入学爱知大学-中国人民大学博士双学位课程项目，第一次通过远程教学系统在线聆听先生的敦敦教诲。虽然那时尚无如今日这般广泛应用的在线网络教学系统，远程教学系统的图像传输有时并不顺畅，但就在一堂堂的远程研讨中，先生为我打开了一扇全新的学术大门。在先生的课堂上，不仅接触到国际政治研究的别样视角，而且对于研讨课的组织形式有了全新体验。先生的循循善诱、娓娓道来、谈笑风生，已成为我记忆中的宝贵财富，之后的从教生涯也不断受益于此。

难忘先生的真诚谦和！2005年6月，在北京第一次见到先生，依然如课堂上那般和蔼亲切、谦和儒雅。不过与课堂上不同的是，在共进晚餐时，先生谈了更多包括但不限于学术的事情，谈到自己的家族往事，谈到被卷入旧时代战争的三位兄长，谈到对小泉纯一郎政府派兵参加伊拉克战争的看法，谈到日本政治与社会的新变化。在轻松自然的氛围中，先生的谈话亲切真诚、内容丰富、见解深邃，作为学界后辈，我深受启发与触动，更为先生的谦和所感动。

难忘先生的殚精竭虑！作为爱知大学-中国人民大学博士双学位课程二期生，我有幸看到项目启动之初先生对这一事业投入的巨大心力，对我们这些漂洋过海而来的中国学生更是关爱有加。我们抵达日本第一天，先生即于当晚设宴款待，其间对我们即将开启的留学生活各种叮咛嘱咐，让我们在异国他乡感受到了亲人般的温暖。我们二期生在日留学期间，先生已年过六旬，多年疾病缠身，但仍坚持带我们前往京都、奈良等地参观学习。在奈良参观学习期间正值酷暑，烈日当空之下，先生不顾自身年事已高，亲自与我们这些年轻学生山间骑车前行，一边骑行，一边为我们讲解日本历史文化。先生对工作的敬业奉献、对学生的无私关怀，永远铭刻在我心中。

言及于此，百感交集：明知世事无常，未料此生永别。天何以远、地何以长，先生之风，比天尤远，比地尤长！山何以重、水何以深，此心之痛，比山尤重，比水尤深！先生安息！

熊李力 中国人民大学-爱知大学博士双学位课程二期生（2005年入学）

2022年8月10日

## 做中日友好的桥梁，培育有良知的人才

—纪念加加美光行先生—

杨妍

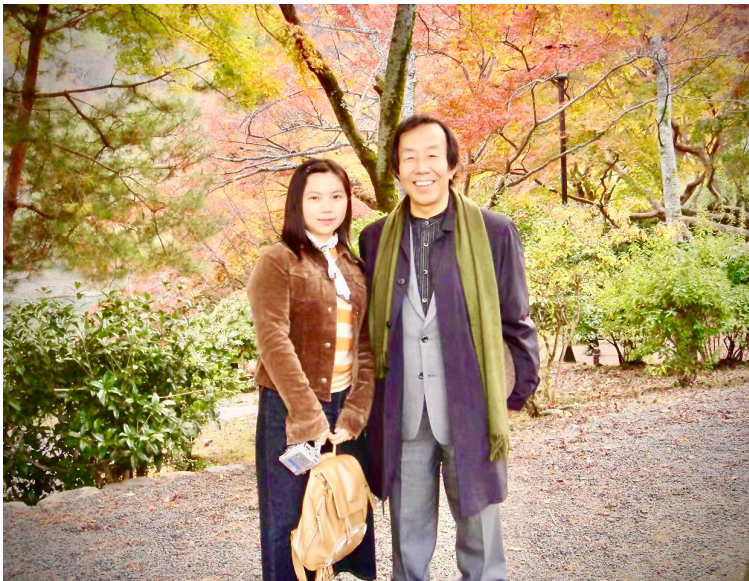
(格瑞斯学院 院长)

6月的名古屋是梅雨季节，今年淅淅沥沥的雨好像是下在人们的心里，因为我们所爱戴的加加美老师离我们而去了，他的身影，他的教导好像就在昨天...

记得初次见到先生是在南开大学，当时先生在给南开的同学们做一个关于中日关系的讲座，讲座中体现的先生的博学，对中国的热爱和友好感动了现场很多同学。之后一年，我有幸成为先生主导的 ICCS 博士生项目的留学生，赴日并在先生门下学习，对先生的为人，为学更是钦佩。

先生一直致力于中日友好，促进中日民间交流，并用自己的亲身经历来教育学生，要有社会良知，促进中日和平。先生上课时告诉我们，他的兄长是战死在中国战场上的，他随母亲去中国祭奠兄长时，中国人民眼里只有母亲和儿子，在亲情和生死面前，国籍根本就不是障碍。记得当时，在课上听到先生讲述的这些，很多同学被先生的讲述所感动的泪水盈眶。

先生还经常带学生们外出考察日本的社会和历史地理，用现场教学的方式告诉学生们做学问要精益求精，一丝不苟，而且要以史为鉴。记得刚到日本不久，就到了霜叶红于二月花的季节，先生带领 ICCS 的留学生去岚山看枫叶，并去飞鸟遗迹考察日本历史。记得一路上先生给我们讲了很多江户时代的日本。现地教学让我们不但增长了见识，领略了日本的美丽景色，而且对日本历史有了具体的感悟。现在翻看美丽红叶照片时，还记得先生一路上的谈笑风生，侃侃而谈的博学的知识，只是，如今红叶依旧在，良师不知何处去？



2004年与加加美老师在京都市岚山合影

先生不仅治学严谨，身先力卒，而且意志坚韧。每次出行，长途跋涉都需先去医院做透析。记得先生访问南开，下了飞机直接去医院做透析，走出透析室马上就会见学生和投入研究会议。2006年，先生再次访问南开时，我和同学们去医院陪伴先生，躺在病床上的先生非常羸弱，但是隔着玻璃窗见到我们时，仍然报以和蔼可亲的笑容，让我们感到非常温暖。先生做完透析，我们进去搀扶先生下床，先生却说“不用的，我们一起去看看同学们，明天

还有研讨会”，并于当天就和同学们一起吃了晚饭。晚饭时先生还说“我的身体不知道还可以用多久，我必须和时间赛跑，把我该做的学问，该教的书赶紧多做一点...”。

现在想来，先生一直是在用生命治学,用生命培养爱好和平的年轻一代。现在，每次翻看和先生一起的合影时，总是想起先生温和的语调和博学的谈吐。先生虽然离我们而去，但爱好和平，做社会的良心之士的教诲，会成为鼓励着我们为促进中日和平友好，做一名有社会良知之士的精神力量。

杨妍 南开大学-爱知大学博士双学位课程一期生（2004年入学）  
电子邮箱：yangyancici@gmail.com

## 以赤子之心践行善，以浩然之气追求真

—深切缅怀加加美光行教授—

袁晓晶

(上海大学哲学系 副教授)

2011年，在通过爱知大学大学院中国研究科的入学考试后，我在申请导师的栏目上，慎重地填下了加加美光行教授的名字，但很快得知，加加美教授因身体原因，已不再指导博士。当时，我以为不会有机会和这位和蔼的先生碰面。2012年，研究科移至车道校区，听说加加美教授已经康复，春季会开设一门课程。听到消息后，我毫不犹豫地选择了这门课。十几年过去了，加加美光行教授的人格魅力和学术理念一直深刻地影响着我，以一种无形的力量，激烈着我的为学之路。

加加美教授是一位以赤子之心践行“善”的长者。加加美教授在开课之前，会发来的课程所需要的阅读资料，这令尚未与教授见面的我感到了作为教授强烈的责任感。当时，我们都以为教授可能因身体不适，上课可能会吃不消的。但是，见到拄着拐杖来到教室的加加美教授时，让第一次见到教授的我们大为震惊。他那时讲话时还留有之前疾病的一些后遗症，所以显得有力不从心之处。但是，加加美教授却以异于常人的坚韧与热情坚持上完了90分钟的课时。除却偶尔出现的面部抽搐，你完全不会想到眼前的教授是一位大病初愈之人。

在授课的间隙，加加美教授讲述了他生病后如何用短短三个月时间来做康复训练的事情。



加加美光行教授课程后与学生合影

拍摄于2012年7月19日

此外，对他在年轻时与病魔抗争的经历，也让我第一次对学术生命有了深刻的认识。经过加加美教授的自述，我多少了解了一些加加美教授进行中国研究的学术背景。加加美教授东京大学毕业，进入亚洲经济研究所工作之时，正是中国大陆的“文化大革命”的20世纪60年代。

文革使日本社会出现了战后的新的“中国论”。此时的加加美教授对“文革”也产生了极大的兴趣，想进行进一步的研究。但在25岁时因突发疾病住进了医院。医生对病情的判断十分悲观，告诉他，他的生命只能延续三年左右。但是，加加美教授说，当时他躺在病床上，唯一想到

的是他对于“文革”的理解是否出现了偏差，如果人生剩下的时间不多的话，反而更需要发奋研究，以弥补以往研究的不足，去挖掘“文革”的真相。<sup>①</sup>当天课后，我在日记中写道：如果我在25岁时，被宣判还有三年的寿命，我会将剩余的人生都寄予学术生活吗？这份以生命的长度去钻研学术厚度的专注与诚挚，是对一个青年学子的“灵魂拷问”。后来，我在读到一篇加加美教授的访谈时，还得知他在上世纪70年代因肾病，要时常去医院透析。<sup>②</sup>通过这些，使我认识到，加

<sup>①</sup> 加加美光行教授关于“文化大革命”的研究，是他重要的学术贡献之一。他的极具代表性的研究，中文论文《文化大革命与现代日本》，发表于《二十一世纪评论》1996年8月号，第15-24页。

<sup>②</sup> 何培忠：《日本中国学研究考察记（四）——访爱知大学国际中国学研究中心加加美光行教授》，《国外社会科学》2004年第6期，第74页。

加美教授的学术理念，并没被他云淡风轻讲出来的病魔所磨灭。教授与病魔的抗争，成为我能够突破学术困境的精神动力。

经加加美教授的讲述，我也多少了解到一些教授进行中国学研究的个人背景。他坦率而真诚地表达了他对于 20 世纪以来日中关系的担忧，对历史上的日本的军国主义也进行了强烈的谴责。教授的两位哥哥都因战争而客死他乡，所以他对一切战争行为都感到愤慨。加加美光行教授在课上讲授日中关系时，毫不避讳地让我们从中国来的学生与日本同学一起讨论“二战”的问题。当一位日本同学对战争表示不置可否时，加加美教授以个人的经历，就战争问题表达了他立足于自身的理性思考的教育。我们在与日本同学的交往中，都尽量回避了作为日中两国共同的“历史伤痛”的问题。但不同的是，加加美教授开诚布公地提出这个问题，并要求日中学生进行认真的反思。日中关系的那堂课，对我的历史观有着深远的影响。作为亚洲最重要的两个国家和一衣带水的邻邦，中日两国要建立长久的友好安定的关系，需要正视历史，珍视历史，摒弃战争。

上世纪 90 年代，加加美教授加入爱知大学，力排众意，创办了现代中国学部，秉承了爱知大学的传统。现代中国学部和大学院的中国研究科的中国教育和研究、日中关系的研究，包含了深厚的人文主义传统。这一点也体现在加加美光行教授和其他教授，工作人员对中国学生的关爱之中。也因如此，我结束学业回到中国后，依然感恩在日本学习时所有老师、朋友，乃至来自陌生人的帮助。也持续关注着日本社会的动态，对日本的历史文化也产生了极大的兴趣。这些都与加加美教授的坦诚不公，赤子之善有着极大的关系。

作为一位学者，在加加美教授的深厚的学术思想中充满了坚毅与广阔的浩然之气。他给我们上课时讲的第一个议题便是《现代中国学的新范式——共同态度性的提倡》。在他执笔的长达 22 页的论文中，他明确提出了“地域研究”的基本观点，以开阔的视野和论据论证了“地域研究”得以兴起的历史过程、地缘政治等背景。以切中要害之笔势概括了“中国研究”在日本学界的特点与不足。提倡以“共同态度性”作为新的中国研究的范式。加加美教授提出打破学科间的限制，超越因“场地”不同而产生的价值判断的差异，警惕东方主义的理论，以“共同态度性”来进行对现代中国的客观和全面的理解。加加美老师提出的新范式，使我逐步意识到纯粹哲学的、理论的、形而上的研究，不足以真正地理解中国，乃至东亚文明的内在结构。要真正理解中国，理解“东亚”，就需要以“共同态度性”来进行思考，以问题为核心，以现实为基础，以世界为视域，以跨学科的方法为路径，这是一种可称之为“前所未有”的方法论。在我看来，这才是从汉学研究到现代中国学研究的真正跨越。

然而，这些对教授的感怀与思念，已失去了当面道谢的机会了。回国后，虽然也会通过邮件与教授联系，但总还是期待可以再与教授见面长谈。印象中，那个瘦瘦小小、步履蹒跚的教授；那个坚持拄着拐杖搭地铁来上课的教授；那个无论是在课上还是课后都笑意满面、和蔼可亲的教授，已离我们而去。他不知道的是，他曾给一位中国学生，注入了坚韧于学术的勇气；注入了直面困境的力量；更注入了中日友好的久远的场景。这位可亲可敬的教授以其瘦小的身躯，铸造了他自身的傲人的人格。如果还有来世，我依旧会选择成为教授的学生，并仍为此而感到荣幸与骄傲。在将来的岁月里，我依旧会将加加美光行教授的学术思想讲给更多的中国学生，让他对中国深厚情谊，长存世间。



## 纪念加々美光行先生

张良

(东北电力大学经济管理学院 副教授)

2003年在报考爱知大学中国研究科之前,为了解情况,我先找到了爱知大学国际研究中心(ICCS)责任人加々美先生想确认一些问题,因是与加々美先生首次见面,当时我较为紧张,但还是问了他很多问题。现在还依稀地记得他回答我说:读博士年龄不是问题,还把ICCS的美好前景展示了一番。他用中文和我交流,而且语速较慢,使我感到他的平易近人,因此我得以充分的了解了入学考试等情况。

第二次是在入学面试时与先生的相遇,他问我对美国政治经济研究所所长布朗的一篇文章《谁来养活中国》这一文章的看法,该文的结论是中国农业的收益递减已经到了边源阶段,(因为该文中用的是统计年鉴的数字,中国耕地面积14亿亩,而卫星普查的数字是21亿亩),中国需要大量进口粮食,实际上中国的亩产量远没有到收益递减这一阶段,听到我回答问题后,加々美先生以特有的微笑,使我明白了,老师们的“想法”,考试之后我被爱知大学大学院中国研究科录取为博士课程生。

入校后,我读硕士时的名古屋大学的导师杉浦洋,到爱知大学三好町校园来看我,他说加々美先生在日本很有名气,1989年动乱后,日本社会的“中国崩溃论”势头凶猛,但加々美先生第一个站出来,认为中国有自己的发展规律,中国不会崩溃,他的认识很大程度上影响了日本的舆情,也就因此,日本被西方说成是“经济动物”。后来我在爱知大学的博士指导教师今井理之先生也证实了这一点。

有意思的是我在名古屋大学时,每周两天在山本工务店打工,整修的校园就是爱知大学三好町校园,这件事同杉浦老师说时,把他乐坏了,他说你自己给自己修整校园还拿工钱,哪有这等好事!

入学前后真正和我们打交道最多的校方人员是村田安老师,他很年轻,比我高一些,他给我的印象是:“什么时候都能找到他,什么事情都能解决,只要给他发邮件他一定回复”。他的中文非常标准,词汇量也很大,村田老师是经济学部嶋仓民生教授的学生,之前保送到南开大学留学,我感到爱知大学有这么熟悉中文的教师,来爱知大学学习心理很是踏实,(我毕业后)每当爱知大学重游时,见村田老师都成为我内心保留的期待。

有一次和加々美先生闲谈时,他问我中国的经济学家整体水平如何,我随口一句:“一到经济运行困难时,那些大家们都很矜持”,加々美先生立刻反驳道,王建的“国际经济大循环”理论,提出的时机是非常及时的。我才知道,加々美先生对中国发展的脉络很是清晰,对中国的研究极为细致,体现出了另一种“工匠精神”。

爱知大学ICCS的学会特别多,每当我有机会发言时,加々美先生总是提醒我“要简短、易懂、切中要害”,这对我影响很大,以致成了我讲话的风格。

加々美先生的办学格局非常大。其中一个大手笔就是，ICCS 和人民大学、南开大学联合培养双学位博士生，并邀请国内外一流学者到 ICCS 来讲学，体现了学者和教育家的开阔视野。人大、南开的同学们来了后，教学的气氛为之一变。他们来后，柯丽华、我和他们接触比较多，一来二去都成了朋友，当然了，到目前还记得他们的青春浪漫，浑身的活力和正能量，当然了，目前还记得他们的名字：王芳、杨妍、方琢、沈一民、宋维强、雷日赣、徐正源、许光清、汤忠钢、朱辉宇。而且名古屋大学的张绍良（我在名大时的指导教官是鸟居达生，但我的硕士论文是张绍良老师指导的）老师也和其中一些同学成了朋友，张绍良回国时，仍和一些爱知大学毕业的同学、老师有联系。总之，爱知大学、ICCS，加々美光行先生、今井理之先生、川井伸一先生、李春利先生等，还有村田安老师，山岸、剑持、富永、店村亜砂、塚本亜未、大崎綾子、湯原、野口武、吴菲夏等同学，我都不会忘记的！

## 永久的记忆

### —纪念我的老师加加美先生—

赵晓磊

(常州大学 讲师)

敬爱的加加美先生是一位诲人不倦的老师，是一位和蔼可亲的长者，是一位关心学生心灵成长的学者，更是一位对中国人民充满了深情厚谊的亲人，他永远离开了我们，祝愿先生在天之灵安详如常！

离开爱大后已有七八年没见到先生了，但是他的音容笑貌和亲切指导的情形总是记忆在我的脑海里，那么的清晰，仿佛正在和我说：“Cho 桑，你怎么看待这个问题？”2022年的5月，惊闻加加美先生去世的消息后，我的眼泪禁不住啪啪落下，我的潜意识很快回到了先生的课堂上。过了许久，我才慢慢清醒过来，感到整个世界都凝固了，都变成灰色了，先生永远离开了我们，我们再也见不到他了。

最近两年多的时间里，新冠疫情一直持续，我非常担心先生的安危，据说这种病毒对老年人健康不利，可是又联系不到他。之前我曾经给先生发送过电子邮件，但没有收到回信。涂明君师兄曾告诉我说，先生退休后，回到了老家埼玉县，已经不再使用爱知大学的电子邮箱了。而让我最感遗憾的是，在2017年夏天没能和涂师兄一起去埼玉县看望先生。

我们那一届双学位的学生是在2014年秋季入的学，开学后我们就碰到了加加美先生的“现代中国学研究方法”这门课。在中国的大学很少有机会履修研究方法的课，因为研究方法的讲授是相当有难度的，但是加加美先生在课堂上用一种很巧妙的方式带动我们积极思考。他先让我们课前阅读有关资料，资料是一些比较抽象的理论性知识，然后在课堂上逐个询问每位同学，确认大家是否对资料内容理解到位。接下来他在课堂上举例让大家分析相关理论，比如抗日战争、文化大革命，甚至是新疆和西藏少数民族问题，以及今天的中华民族复兴、东方学、中华思维等，都涉及现代或当代中国的诸多历史过程或思潮，有些是大家正在经历的。虽然在中国国内接触到了上述问题的大量信息，但在课堂上我的回答确是很可笑的，至少在“后来的我”看来，当时的回答很是狭隘。因为我接触到的大量信息都趋于同质化，所以导致了我世界观的一些偏狭。加加美先生投入在课堂上的极大的热情和精力，给我们带来了客观中立、域外视野、多元主体相互联动的共同态度性等学者应具备的资质和研究态度，他孜孜不倦，循循善诱，专业、和蔼、谦虚、热情等印象深深留在我的记忆中。

加加美先生曾和我们谈到他的哥哥在中国湖南省衡阳市阵亡的事情，战争使他失去了亲人，令他无比痛苦。但他能正视历史，反对战争，批评战争，热爱和平，关爱人类，他对中国人民充满了深厚的感情。而中国普通民众善于同情和理解的情感特质，也给他留下了深刻的印象。在课堂上他给我们讲到：“主动进攻别的国家，到他们的领土上和他们作战，这还不是侵略的话，那什么才算是侵略呢？”后来我把加加美先生批评“名古屋市长河村隆之否

定南京大屠杀言论”的报道发给我国内的同事和同学后，他们对先生肃然起敬，明白了日本学者在反对战争方面的努力，同时也对今后中日友好关系的发展充满了信心。

2014年冬天的一日，天气很冷，那天加加美先生给我们上完了学期中的最后一堂课，先生饱含感情地给我们讲研究者所应当具备的态度，还挨个询问我们每一位同学对中国研究的共同态度性的理解。我当时一直忙写自己的论文，课上的资料阅读得并不到位，理解就更难说了，其实也可以说是自己学识还太浅，理解无法深刻，尤其是对难以把握的研究态度的理解，内心惶恐不安。最后先生对我们一一做了点评，并微笑着向我们点头，似乎是在勉励我们不要气馁，继续努力，这些细节让我终身难忘。

现在还清晰记得，那天中午我们正在车道校区一楼的餐厅吃午饭，透过餐厅的玻璃窗可以看到校外的街道。先生准备到街边的一家小餐馆里用餐，餐馆的入口是一个坡道，他拄着拐杖踏上台阶，很吃力地迈动步子，突然他的身体晃了一下，后仰摔倒在台阶下。我们几位双学位的学生赶紧冲了出去，跑到老先生面前，想扶他起来，发现他暂时站不起来，大家都在询问他感觉如何，我当时还轻轻抚摸他那瘦的可怜的腿，询问他是否感觉异常，我担心腿骨是否会摔伤，他抬头微笑着对我说：“没事的，感谢你们！”他的表情是那样的温和慈祥，语气又是那样豁达。事后去医院检查，先生摔骨折了，也就是这件事情发生后我才得知，当年老先生已经七十岁高龄，而且还患有严重疾病，身体状况非常不好。但他热爱课堂，尤其是关心中国的留学生，他本可以退休颐养天年，但执意要给我们上课。第二年春季，他坐着轮椅又来到学校，还想给我们上课，但大家都知道他的身体条件不允许了，每个人都感动得热泪盈眶。

加加美先生一直密切关注中国的问题，关心中国人民，他把自己的一生献给了中国问题研究。2015年的春末，在爱知大学中国研究科举办的一场关于中国问题研究的学术会议上，我又见到了先生。即使摔伤骨折后，他仍在关注中国问题，会上他依然面带笑容，谦虚而又从容地做报告，内容是关于中国民族自治或共治的学术探讨。遗憾的是，这次会议是我和先生最后的相聚。

回到中国后，时常想起加加美先生，一种不可名状的思念。

我还经常打开邮件阅读先生发送给我的课程资料，以警醒自己理想的弱化，和纠正自己狭隘的世界观。

加加美先生离去了，但先生留下的思想和精神并没离去，我会努力继承和发扬先生的事业，身体力行先生倡导的中国学研究方法论，延续他的未尽之业。

赵晓磊 南开大学-爱知大学博士双学位课程十一期生（2014年入学）

2022年7月26日